

現代人は 現実を受け容れられない

九折
空也

複雑化した状況と、 解きほぐす四つの糸口

たくさんのことを知るより、何にでも使える中央的なことを知るほうが大事だ。

現代人は、現実を受け容れることができない。

ここで言う現実とは何かというと、人々が自分に冷たいということ。

また、自分自身も、周りのすべての人に対して冷たいということ。

友人が本当の友人ではないということ。

胸に抱えるような恋人などいないということ、またこれから先も、そんな

ものには縁が無いということ。

自分で自分自身を愛せないということ。

青春と呼びうる確かな思い出はないし、仕事というのは就職前から憂鬱で

しかないということ。

夢などなくて、本当のことを言うなら、引きこもって動画を観つづけ、快

適なエステなどに通うだけではないということ。

本当には何一つわかっておらず、頭の中がぼやけ、クリアなことは何一つ

なく、漠然とした不安と恐怖だけがずっとつきまとい、本当にぐっすり

眠れたことなんてないこと。

無理にでも運動を義務づけ、特化したようなトレーニングをしていないと、

すぐに身体がだるくなつて、まともに動けなくなること。

仮に無限の資産と自由な時間があふれかえっていたとしても、本当にやり

たいことなんて何一つないこと。

あまりにも、きらいな人、苦手な人がたくさんいて、正直に言えばそうい

う人たちに包囲されている気がするということ。

このような、危機的状況の中に、現代人は生きている。

状況は危機的なのに、訓練は投げやりで陳腐化しており、どのようにして
= 本当の意味で = 生き抜いていくかについては、誰も教えてくれそうにない。

自分が知っていることといえ、禁煙区域で煙草を吸ってはいけないとい
うこと、駅前に自転車を放置してはいけないということ、芸能人が不倫をし
てバレると失脚させられること、それぐらいのものだ。あとは自分の業界の
ことしか知らない。

一時は、リア充と言ってみたり、このごろは陽キャと言ってみたり、あ
るいは勝ち組と言ってみたりしても、その中に自分が誇りとするものはあり
えないし、またそうしてつながりができたはずの仲間達にしたって、自分の
ことを本当に気遣ってくれるものではないことが前もってわかっている。

それは、自分自身だって、その仲間のことを本当に気遣っている覚えはな
いからだ。

ただ、それでも陰キャやぼっちよりはましだということだけで、自分の価
値を陰險な形で肯定している。

テレビやユーチューバーを覗いていても、その内心では、体験より批評が大
半を占めている。

ミュージシャンが新曲を出すと、「この路線がいい」とか「前より表現力が
増している」とかいつて、評論家ぶると、一時的にとても気分がいい。

それは、恥じるべき小人の振る舞いだ、知ってはいるけれど、どうして
も気持ちがよくてやめられないし、それ以外に音楽を聞く理由なんてわから
ない。

けつきよく、

「おれが（わたしが）批評する以外に、他に何かすることあるの？」

と思っている。

現代人は、孤独を感じている、のではなく、事実として孤独だ。

僕は、目黒区に住んでいるからよくわかる。

目黒区というと、隣は代官山で、その隣は渋谷だ。

若い人たちがいるが、二十代半ばというのは本当には若くないし、誰もが
無理やりにスイッチを入れて、楽しいふうを作り上げているのが、傍目にも
わかる。

何も教わっていない人、何も学ばせてもらっていない人、何も得てきてい
ない人、何の愛にも届かない人が、どれだけ大騒ぎの主役ふうに大声を出し
てみたって、そんなものが楽しくなれるはずがない。

むしろ、内心に巨大な不安があって、その不安につぶされてしまわないよ
う、逆に野卑な大声をあげ続けている。

巨大な不安は、ひとつには、もう自分は若くないということ、ひとつには、
ここまで何も得てきていないということ、ひとつには、未来があるような気
がしないということ。

無理にでも楽しいふうにご自己演出していないと、たちまちつぶれてしま
うのだ。

そして残念なことに、それらの不安は、予想のとおりびつたりの中してい
る。

そのとおり、彼らはすでに老いくたびれていて、これまでに何も得てきて
いないし、やはり未来は与えられていないのだ。

それでいて、孤立しており、周りのすべての人は、けつきよく自分に対し
て冷たい。

これだけでも、きわめて厳しい状況なのに、現実というと、さらに人々が
予想していないマイナスまで、ここでは開示して話さねばならない。

今、老いも若きも、少しだけ内面に踏み込んでみれば、そこには人のここ
ろがあるのではなく、ひたすら内面の気持ち悪さがある。

気持ち悪くて、うざく、幼稚で、傲慢で、おぞまさが詰まっている。

多くの人が、精神的には幼児のまま、陽キャになったり勝ち組になったり、
父親キャラや母親キャラになったりしている。

精神的に幼児のままということは、人の痛みなんかわからないし、この世

界や、命のこと、愛のことなんて、実はちっともわかっていないということだ。

きわめて幼稚な欲だけがあり、あとは、場面ごとに「これはイヤ」と思うという、ただそれだけの原理で生きている。

その様相は、まるで昆虫のようで、それなのに、肉体だけは大人で、大人という以上に老け込み始めているのだ。

仮に、中学生に出された課題として、作文の要求があったら、大人としてその作文を書いても、きつと「自分のことばで書きましよう」という赤点がついて返ってきそうだ。

今、状況は複雑化していて、人心はパニックを通り越し、正式に「ヒステリー」と認めて差し支えないような状態になっている。

ここで、複雑化した状況を解きほぐすのに、「現実を受け容れられない」という端緒を糸口として掴むのが、どうやら唯一の方法になる。

僕はここしばらく、このもつれた糸を解きほぐす、第一の端緒を探していたのだ。

解きほぐす手順はこのようになる。

まず、現代人の置かれている状況は、ここまでに述べたように苛烈かつ冷酷で、とてもではないが、この現実を受け容れることはできない。

とても正視に堪えないのだ。

この、受け容れられない現実を、それでも毎日見せつけられるとき、人はどうなるかという、短期的にはパニックになるが、長期的にはヒステリーを起す。

心理学でよく知られているとおりだ。

ヒステリーは、さまざまな症状をもたらすが、今の状況においてヒステリーは、典型的に一種の「認知症」をもたらす。

受け容れられない現実を、直視して認識してしまうと精神が破綻してしまうので、その中を生きていくのに、認識の機能そのものを損壊させてしまうのだ。

精神の機構が、認識機能の損壊を自ら選ぶ、と考えていい。

今その点で、いわゆる引きこもりの人や、アニメ・アイドルへのオタクの人、ソーシャルゲームに過剰な課金をする人、アルコールやギャンブルに依存する人、陽キャとして過剰な自己演出をする人、いわゆるオラついている人も、すべて同じ画一的な症状にあるとみなしている。

「そんなことをしていてもしょうがない」とはわかっているし、自分のしていることが自覚的にもただの「醜態」ということは、わかっているのだが、認識機能が損壊しているので、その自分の不毛と醜態についての認識を、有為の時間保つことができないのだ。

何かについて考えようとしたとき、その思考が、数秒とまたず分散し、モザイクが掛かって見えなくなるという症状があることを、すでに多くの人が自覚しているはずだ。

認識の機構が損壊している。

それはまさに、一種の認知症であり、隠れた認知症とみなして差し支えない。

もし名付けるならば、「冷酷環境性・認知症ヒステリー」というあたりになるだろう。

現代の環境は、個々人にとつてもとても冷酷で、この冷酷さに耐えられるほど、多くの人は頑強ではなかった。

元来、人のこころや精神というのは、訓練なしにはそこまで強くなく、オレオレ詐欺というような非道の詐欺があるということや、父親が母を放つておいてスナックに行っていたというようなこと、あるいは手元の端末にスパムメールが届くというようなことでさえ、いちいちショックを受けるものだ。

まだ覚えている人もあるかと思うが、十五年前には、友人に出したメールが返ってこないということだけでショックだったし、返信しなかった側もそのことをずっと気に病んでいたりしたものだ。

今、現代人の置かれている環境は、冷酷さにおいてまったく比べものにならない。

それでも人々がさしあたり、平穩そうに暮らしているのは、この冷酷さの環境について、すでに認識する機構が損壊しているからだ。

またこれにより、多くの人々は、身体の側が愚鈍化し、異様に重く、しんどく、言うことをきかなくなっている。

なぜならば、常時、ヒステリー状態にあるのだ。神経は常に恐慌状態になり、身体は異様に硬化し、重く、物体のようになり、精気の通わないものになっている。

安易な意図で例に出すわけではないが、僕は昔、知人にてんかん症状の持ち主がいた。彼が一度、ゲームセンターで倒れたところを見たことがあるが、とっさに彼に駆け寄って触れたとき、その身体は異様に硬く、重くなっていた。神経が暴走したのだから当然だ。

現代人の身体は、あの、てんかん症状のときの身体の感触に似ている。

このようにして、冷酷な環境下、人はヒステリーにより認識機能の損壊を起こし、その副産物として、全身の硬化と愚鈍化を起こしている。

全身の愚鈍化は、内臓等にも及ぶから、現代において、まともに食事ができない人や、異様に骨の弱い人、あるいは生まれつきでなくヒステリーから酒精が分解できず倒れるというような人がたくさん出ているだろう。

これが第一の糸口だ。

続いて、第二の糸口はこうだ。

ヒステリーによって認識機能の損壊を選択したとしても、実生活は続けてゆかねばならないので、単純に「現実がわかりません」と言い張ってすべてを切り抜けていくというわけにはいかない。

それで、現実感覚はどうしても必要ということで、現実という感覚を持つのだが、やはり現実そのものは受け容れようがない状況があるので、ここで空想による架空の現実が捏造されることになる。

これはある意味、思いがけないアイディアであり、思ってもみなかった仕組みだ。

現実が受け容れられない、ということと、現実感覚がないと生きていけな

い、という矛盾を、まったく予想外の角度から、かりそめに解決する方法を、人の精神機構は導き出すということになる。

人々は今、現実と共に生きているが、人々が背後に置いているのは、本当の現実ではなく「空想された現実」だ。

この、「空想された現実」の機能が、気が利いていて、逆にヒステリーによる認知症を、上手い具合に覆い隠している。

一見すると、誰もそういった症状を持つてはならず、誰もが健全に見えるのは、この「空想された現実」があまりにも上手く機能しているからだ。

もしヒステリーが、露骨な妄想様の症状を示すものなら、その病態はすぐに見咎められるのだが、「空想された現実」は器用にフェイクをこなすので、ほとんどの人を健常の状態に見せかけている。

とはいえ、この「空想された現実」は、やはり空想に過ぎず、本質的には理性的でない妄想に近いものなので、このことには近づけば近づくほど、その異様さと不穏さ、薄気味悪さが立ち上ってくる。

今、多くの人がもう飲み会というようなことをせず、仕事の付き合いならあくまで職場でのみ接触し、個人的には接触しないことを、絶対的に遵守しようとするこの背後には、すでにこの「空想された現実」の不穏さと薄気味悪さがあるのだ。

職場等で接触している場合はぎりぎりごまかせても、個人的に接触すると、そのゾツとするようなものが必ず立ち上ってくるということを、すでに人々は直観的に知っているからこそ、個人的な接触は避けようと決意している。それは今や、利益的で正当な判断だと言わざるをえない。

「空想された現実」は、どのあたりで、そのおぞましい臭気を立ち上らせてくるだろうか。

たとえば、先に挙げた「陽キャ」のような人々がいたとして、その中の多くは、きっと自分が面白くて人気のある存在だと自分のことを捉えているだろう。

だが本来、冷静に考えれば誰にでもわかるとおり、そうした陳腐な自己演

出でしかない「キャラ」のような振る舞いをする者は、本質において面白くない人のはずだ。ずば抜けた経験や才能やウィットがない者が心底から面白い人であることはありえない。

あるいは、そこまでむつかしく考えなくても、ただ冷静に考えるだけで、「そんな、人がよろこぶほどには面白くない」ということは、単純な感覚においてわかるはずだ。少なくとも、彼自身以外のすべての人は、冷静にそう見切っている。誰だって、自分のことでなければそこは冷静なものだ。

ここで、彼個人に少しでも深入りする形で接触していくと、実は彼自身にとっては、「面白くて人気がある自分」というのは、「建前」なのではなく彼にとつての「空想された現実」なのだということがわかってくる。話は嘸み合わず、どうしても、話しているあいだにあちこちで、ただならず鼻につくところが出てくる。

今、少しでもそうして、個人的に深入りして接触すると、実はそれぞれがとんでもない強引さで、「空想された現実」を支えに、自己を成り立たせているのだということがわかる。

彼はけっきょく、事実としてはさして面白い人ではないのに、自分は面白い人だという「空想された現実」にしがみついて生きており、異性にはまったくモテないのだが、少し努力をすればモテる側になれるというようなことも、「空想された現実」の中にきっちり組み込んで自我を成り立たせている。

その「空想された現実」は、やはり至近で見るとただの妄想に過ぎず、けれどもその妄想が彼の自我を成り立たせている核であるので、うかつに触れることはでない。だからこそそういった経験が数度もあると、人は個人的に踏み入って接触することは本能的に避けるようになるのだ。それは単なる嫌悪感からではなく、妄想という現象がこちらの精神機構をただならず混乱させ、場合によっては損傷させてくるからだ。

今、たとえば寒村に住む老婆は、テレビを観ながら現実に親しんで生きていくように見えるが、実は老婆はたとえば「古くからこの町に住む、この町のおばあさん」というような「空想された現実」で自我を成り立たせて生

きている。現実的にはすでに、「この町」と呼びうるような共同体性は残っておらず、老婆はただの孤立した高齢者でしかないのだが、「空想された現実」において老婆は、自分は町と共にあり、町に幅を利かせている者だと自分ひとりきりで思い込んでいる。だからこの老婆は、偶然にもその村でテレビロケなどがあつたとき、「許可は取ったの？」と何の権限もなく詰め寄ってきたりする。彼女の「空想された現実」においては、彼女にはそれぐらいの権限は十分に付与されているのだ。

あるいはここに、一人の中年男がいたとする。この中年男は、見るからに人好きがせず、陰気な印象があり、気も利かず無愛想で、基本的な礼節もなっていない。人に対して思いやりもなく、気配りもできず、自己中心性ばかり高いのだが、彼は重々そのことを自覚しながらも、一方で心機一転すれば易々と優れて愛される人物になりうると自分のことを捉えているし、自分のことを勤勉でやさしく、人に尊敬されるべき性質の者だとも思い込んでいるのだ。なぜなら彼の「空想された現実」においては、彼はまったくそのとおり

の者であるから。

それで彼は、まったく人の知らないところで、何かの演者としてのオーディションに応募していたりもする。他人から見ればまったく素っ頓狂なことで、見るからに人好きもせず見栄えも悪い彼が、そのようなことへ挑戦することには首を傾げざるをえない。だが彼の「空想された現実」においては、彼は見栄えはともかく、どことなく独特のオーラが出ている特別な素質の人なのだ。彼はむしろ、そのオーディションに応募したことが、自分として唯一「現実に向き合った」という記憶になることもある。

同じような構造で、寒村の老婆のところにも、悪徳商法の業者はやってくる。老婆は悪徳商法に乗っかるつもりはまったくないが、業者は第一に「このあたりでは特別に立派なお宅だと思って」「この町の代表の方にお目に掛かるつもりで」というような称賛をして、老婆の持っている「空想された現実」を探る。老婆は自分の持っている「空想された現実」が他人と共有されることに餓えているから営業マンとの会話に食いつく。ここで老婆は、営業

マンがウソを言っているとすると、肯定された老婆自身の「空想された現実」もウソだということになってしまふので、営業マンはウソを言っておらず、「小さい仕事だけど熱心にやっている人」だとみなす。そうして悪徳商法にも契約者が出る。この被害者は詐欺師について、「ウソを言っているようには見えなかった」とコメントする。

第三の糸口として、第一と第二の循環を見なくてはならない。

もともと、冷酷な環境下、現実が受け容れられないということから、人は防衛のためにヒステリーを起こさざるをえないということだった。

そして、ヒステリーは知られざる認知症を起こす。精神は自ら認識機能の損壊を選ぶのだった。

その隙間に「空想された現実」という、第二の症状が入り込む。

ここで必然、「空想された現実」が彼を救えば救うほど、「空想でない現実」との距離は遠くなることになる。防衛がよく機能すればするほど、彼は受け容れたい「空想でない現実」から離脱してゆけることになる。

だが、そこから離れれば離れるほど、今度はますます、その「空想でない現実」を受け容れることが耐えがたくなっていく。

町で幅を利かせている(はずの)老婆は、今さら「ただの孤立した高齢者」という現実を受け容れられないだろうし、勤勉でやさしく独特のオーラがある(はずの)中年男は、今さら「ただの見苦しい醜男」という現実を受け容れられないだろう。

このようにして、現代人は今、単に冷酷さと窮乏に喘いでいるのではない。

「空想された現実」と「現実を受け容れられない」ということの拡大循環の中で、「救われながらヒステリーを深める」という状態にあるのだ。

「空想された現実」は、いくらでも自分を救ってくれるが、そのたびにヒステリー症状を重くせねばならず、そのたびに認識機能の損壊を深めねばならない。

そうして、他者には知られざるところで、毎年あるいは毎月とっていいほど、人は己を不穏にし、薄気味悪くし、認識をちぐはぐにして、心身を異

常にしていく。

ヒステリー症状が重篤化しているのだから、全身は異様に硬く、異様に重く、目はうつろで、情緒は無秩序で、認識機能は散逸していくのに、「空想された現実」における自我は一方的に肥大していく。

人々は今、このことを、自身において突きつけ、警戒せねばならないと共に、自身と大切な人を守るためにも、こうした現象が今人々を食い荒らしているということを認め、対処しようように備えねばならない。

周囲を見渡すと、誰もおかしなところはない、健全で健気な人たちばかりに見えるのだが、いつのまにか、われわれは人と付き合うということをよろこびにはしなくなっている。

世の中に、クリスマスのムードやお正月のムードはなくなり、バレンタインデーは消え去り、映画のいちいちに感動することはなくなり、新しい歌に打たれて一晩を過ごすということはなくなった。

人々の多くは、気質として善人だから、目にするすべての人を、おかしくなってしまった人と見ようとはしない。

むろん、目にする人のすべてを疑って掛かるのは、すばらしいこととは言えないが、われわれはすでに互いを警戒しなくてはならない。

慎重な人ほど、自分がおかしくなっていないとは断言しにくいように、周りのすべての人に対して、その判断は同様の慎重さを向けねばならない。

全体を見渡したとき、人心が三〇年前から変わっていないとはとても言えないし、素直さや純朴さや、誠実さや真摯さを増したともやはり言いにくい。

今や人気のお笑い芸人が、性風俗の店に行ったという話をして、思春期の女子中学生は何の反応も見せないだろうけれど、それは思春期の少女が若年のうちにもセックスについて強靱な魂魄を具えたということなのだろうか？

昔はよかったと言う必要はないし、今さら過去に逆行しようとする試みは無意味だし、そんなことを唱えるほど僕も愚かではないが、少なくとも僕はここしばらくの経験から、過去との比較を必要としない直接の不穏を人心に

感じている。

「人」がこういうものだったという記憶は僕の内にはない。

解きほぐすための第四の糸口。これは、いささか具体性を欠く指摘になるが、それでも僕がある種の誠実さに努めるなら、このことを話さないわけにはいかない。

ここまで話してきたとおり、人々は今、冷酷な現実を受け容れることができず、防衛のためにヒステリーを選ばざるを得なかった。その結果、身体は硬く、異様に重く、バラバラになって愚鈍化し、認識機能は損壊して、知られざる認知症の様相を示すことになった。

とはいえ、現実を認識しないで生きていくことはできないから、現実を受け容れる代わりに、「空想された現実」というものを自分でこさえるようになった。

「空想された現実」の中で、自我は守られるものの、それはやはり妄想に支えられて自我が保たれているのであり、人々は互いに近づく、何か思いがけもしなかった互いの臭気に晒されるようになった。

「空想された現実」は、それぞれの自我を守るものの、そうして守られた自我はますます、真の現実を受け容れられなくなり、現実を受け容れないまま、自我だけが膨張していく。

いったん膨張した自我は、以前より強固に守られねばならない。

よって、「空想された現実」に救われながら、ヒステリーと知られざる認知症は、相互に循環し、その度合いをますます深めていくことになった。

その結果、もう目つきがおかしく、皮の下一枚で、いつでも情緒が逸脱寸前で不穏だ。

薄気味悪いという印象が、もうすれちがう赤の他人にもはっきりと感じられる。

解きほぐすための第四の糸口は、この心身にダメージを蓄積する、ヒステリーと空想現実の循環について、当人が臨界点を予感し、何か魂のおびえを覚え始めているということだ。

人は、自分がやがて死ぬことを知っているから、漠然と、自分の魂とか、その魂が死後どこに行くのかとかを、ころのどこかで不安に思っている。

また、一部の人は、現代の宗教関係者や、宗教にそれなりに入れ込む人たちについて、その魂が救済されている気がしない、と確信のように直観するところがあるかもしれない。

今や「宗教」というと、むしろ魂の汚損というイメージが大で、救済どころか逆：：：という印象を、確信のように覚えた人も少なからずあるかもしれない。

あるいは、そこまで大げさでなくても、初めから話しているとおり、認識機能の損壊が、自分のこととしておそろしく自覚される、という段階に来ている人もあるかもしれない。

自分のこととしてか、あるいは、周囲のこととしてか、身内のこととして、ということもありうるだろう。

もし自分自身、己の魂のことを考えようとして、その考えようとする思念が、何かのノイズによって、七秒後には行方不明になるようであったとしたら、いいかげん自分の機能は壊れていて、もう元には戻らないのじゃないかと、おそろしくなることはあるだろう。

自分の内側の、何かがおかしい気がして、それについて考えようとしても、七秒後には雲散霧消し、理性としての思考はないまま、ただとつもない危機感と、恐怖感だけが残っている。

そのようなことの中で、すでに恐慌寸前の「悲鳴」をあげている人が、今すでに少なからずいる。

もちろんそのことについて、直接の救済の手続きを、僕などが持っているわけではない。

ただ、まだ手遅れでないケースに向けては、せめてもの対抗策として、今僕は自分の知りうる限りのレポートを書き話しているだけだ。

ここに示した、第一から第四の糸口についても、けっきょくのところ、数秒後には「よくわからない」と、認識機構が拒絶することは大いにあるのだ。

仮にそれが、ここに説いたように本当に認知症の一形態だったとして、もはやその認知症の進行を止めることはできないのだと知られたら、そのことには単純な恐怖があるだろう。

僕は今、ここに書き話した説が、たとえば国立大学の学生によって、滑らかに読み取られて把握されるとは思っていない。

どれだけ平易に、なるべく把握のしやすいように努めて書いたとしても、知能以外の理由で読み取りと把握は瓦解し、揮発していくだろう。

僕が前提にしているのは、正当な知性の持ち主によって自説が読み取られることではなく、多くはヒステリーをもって迎えられるのではないかということだけだ。

単純に合理的に考えて、今、ヒステリーを起こさず迎え入れられるには、相手の持っている「空想された現実」に即した発言や振る舞いをこちらから差し向けるしかない。

すでに多くの人が無意識にそうしているようにだ。

ここに書き話したことが、たとえ少数にであれ、どのように迎え入れられ、あるいは拒絶されヒステリーの餌食になるのかはわからないが、それでも僕は自分自身で卑劣でないと思ってしまうスタイルに立ってこのことを続けたい。

解きほぐすための糸口、およびその手順は以下のとおり。

【1. 現実を受け容れられない】

現代の状況は苛烈で冷酷だ。人々は自分に対して冷たく、自分は誰にも愛されることがない。自分は何も得てきておらず、本当には何もわかっていない愚物で、現実はまだそのことの自己責任を取らされる。このような現実はいかに精神的につらく受け容れることができない。

現実を受け容れることができないので、精神はヒステリーを選び、ヒステリーは認識機能の損壊、つまり一種の認知症を選んだ。

これによって精神は守られるが、常時ヒステリー状態にあるので、神経は暴走しており、身体は硬く重くなり、バラバラになって愚鈍化する。しかも

認知症を起こしているので目つきはおかしく、コミュニケーション能力は病的に不全だ。

【2. 空想された現実】

現実を受け容れられなくなった人々は、現実を失って生きるのではなく、代替に「空想された現実」を自作して持ち、生きるようになった。よって、ヒステリーによって愚鈍化し、不穏化したそれぞれの人も、「空想された現実」の中においては、優れて正義の、人から認められ愛される者だ。

たとえば一人の中年男は、「空想された現実」の中で、ちょっと努力すれば「彼女を作る」ことができる者であり、あるいは一人の老婆は、「空想された現実」の中で、町の歴史と共にあるちょっとした存在感の誰かだ。

一見すると、ごくありふれて健全な、ふつうの現実を生きているように見える者でも、一歩踏み込んで触れてみると、その背後にあるのはふつうの現実などではなく、いつのまにか逸脱をきわめて作り上げられた「空想された現実」だ。このことに触れると精神病に類似した感触が恐怖と混乱をもたらす。

【3. 循環と肥大】

「空想された現実」によって、現実の受容は回避された。けれども「空想された現実」がそうして自分をかりそめに救済してくれる以上、ますます当人は真の現実受容から遠ざかっていくことになる。現実が「ますます」受け容れられなくなっていく。ヒステリーと認知症は「ますます」重くなっていく。

「空想された現実」において、自分はひとかどの存在であり、自分は可能性に満ちており、自分は秘めた徳性を豊かに持つ者だ。だからヒステリーの中で卑屈な振る舞いを見せていても、その内心は人々を鼻白ませるほど膨張した増長と傲慢に満ちている。彼には現実が存在していないのではなく、「空想された現実」が彼にとつての現実なのだということを忘れてはならない。

なお現代において病的に過敏な「炎上」や「マウンティング」の反応が起こるの

は、内部的にこの循環によってすでに自我が管理不能なまで膨張していることによる。著名人をあざ笑ったり、誰となく他者にマウントしたりするのは、増長した自我においてまったくびつたりとの正当な果報で、これを逆転されるようなことは断じて許されないのだ。

【4. 終焉の予感、魂のおびえ】

いくら「空想された現実」が自分を守り、励ましてくれるにしても、たとえば死はどうしようもない現実だ。そのときには魂が問われるだろうという予感がそれなりにする。そして魂が問われるとなると、なぜかこれまで自分を励ましてくれた「空想された現実」が完全には自分を励ましてくれない。

あるいは、いくら「空想された現実」の中で、自分は冴え渡る者でありえたとしても、自分の思考が数秒もまたず霧消し、思考に霧が掛かり続けるのは、自分の損傷について不安がよぎるだろう。しかもその損傷は日々進行してゆき、そのたびに友人や知人は離れていくのだ。

まして、「空想された現実」が自分を励ましてくれているにも関わらず、なぜか自分が眠れなくなったり、根拠のない情緒が無秩序に乱れるというようなことがあり、具体的に苦しむことになる。またその苦しみは止むことがない。

よってこの人々は今、膨張した自我でマウントを取りながら、同時に認知症で思考を散逸もしながら、ひたすらの不安と恐怖と苦しみによって「悲鳴」をあげ始めている。現代の複雑化した状況は今、この「悲鳴とマウントと認知症」という三重苦に締めくくられている。(本稿はその救済手続きを述べるものではない、救済の手続きなど僕にはまったく心当たりがない)

所屬する原理と

階層構造

先の段に述べたこととして、第一に、「現実を受け容れられない」ということが、まさか認識機能の損壊(認知症)を選択することで回避されるとは、予想外だった。

なんというか、たとえば部屋を片付けられない人が、「部屋を片付けられないのでホームレスになった」というような、思いがけない「荒技」を感じる。

確かにそれで、部屋が片付かないという問題は、別の角度から粉砕的に解決されるけれども。

しかも、現実を受け容れられないとなると、代わりに「空想された現実」を自作充填し、それを現実で代替して生きるというのも、まったく予想外のことだった。

まるで、たとえば通知簿の成績が悪いから、自作した通知簿こそ正規の通知簿とする、というような、これにもやはり思いがけない荒技を感じる。

「循環と肥大」にしたって、やがて破綻が来るなら、その予感がしたときに引き取ればいいのに、そのまま押し切って最後には「悲鳴」に行き着くというのも、やはり思いがけない荒技の感触だ。

一步も引き下がらないことに、一種の気概さえ錯覚させるほどだ。

なぜそういうことになったのか、原因はわからないけれども、今ここで試みているのは、原因の追及ではなく状況の分析だ。

なぜこうもぐちゃぐちゃになったのかは、今さらわからないし、今さらわ

かってもしょうがないので、今必要なことはただ、まだぐちゃぐちゃになつていない人が、巻き込まれてぐちゃぐちゃにならないよう、先に冷静な状況分析を得ておくことだ。

人は常に、実際のなことに対処しなくてはならない。

ここでは、実際のなことに対処するために、実用できる、次の六階層を提唱していきたい。

最下層
深下層
下層
中層
上層
最上層

この六階層に、それぞれ把握しやすいネーミングを付与する。

【最下層】「誤導」
【深下層】「怪児」
【下層】「興奮猿」
【中層】「チーム」
【上層】「エース」
【最上層】「応供」

また、この先にいちいち表示するものではないけれども、それぞれは当然「愛」について、正しき者は世界愛に所属しており、誤った者は自己愛に所属している。

そのことをあえて表示すると次のようになる。

【最下層】「誤導」 世界愛 - - - 自己愛 + + + + +
【深下層】「怪児」 世界愛 - - - 自己愛 + + + + +
【下層】「興奮猿」 世界愛 - - - 自己愛 + + + + +
【中層】「チーム」 世界愛 + - - 自己愛 + + + - -
【上層】「エース」 世界愛 + + - 自己愛 + - - - -
【最上層】「応供」 世界愛 + + + 自己愛 - - - - -

この世界愛と自己愛の比率においては、次の点を見ておいてほしい。

まず、見ての通り、階層が中層以降にならないと、世界愛はまったく存在していないということ。

階層が、最下層〜下層に所属する者たちにおいては、愛のありようを問うことじたいが無意味になる。

彼らにとつて愛とは、必ず自己愛でしかありえない。

愛のありようを問うことは、階層「チーム」以上に所属する人たちに向けてのみ有効なことであつて、つまり人々の大半は、終生、愛について問われる必要がない。ということだ。

愛について問う必要がない。

なぜなら、問う前からそれは、必ず自己愛でしかありえないし、それ以外の愛があるということは、彼らの所属においては決して発見されえないことだからだ。

白黒テレビをどれだけぶっ叩いてもカラーテレビにはならないように。

また、最下層と下層において、自己愛の「はみだし」があることに注目してほしい。

この自己愛の「はみだし」は、下層〜最上層の者からは、構造的に予想がつかないものだ。

最下層と深下層においては、自己愛が、予想される自己愛の最大値を超え、別の領域に到達している。

このことがあるから、ある種の人は、周囲に想像を絶するほど「気持ち悪

い」という感触を与える。

それは自己愛の程度が、予想される最大範囲を超えているということ、精神的なめまいをおこせると同時に、

「この人は何をどうやっても自己愛にしか向かわない」

ということが直観されるということなのだ。

だから、見ているだけで「ゾツとする」という感触がある。

仮に、「興奮猿」と「応供」が向き合ったならば、それぞれの和算は世界愛と自己愛をプラスマイナスゼロにするけれども、これが「怪児」であった場合、たとえ「応供」を向き合わせても、世界愛と自己愛の足し算は、世界愛がゼロになり、はみ出した領域分の自己愛だけがきっちり残る。

それが「気持ち悪い」ということだし、それが「救われない」ということだ。

それで次に、最重要のことを申し上げたい。

ここまでお話ししてきたことは、次の最重要のことを申し上げるために、必要経路として説明してきたにすぎないものだ。

それぞれの階層には、所属する「原理」というものがある。

所属原理は、それぞれ次のとおりになる。

- 【最下層】「誤導」…所属原理「憤怒、悲鳴」
- 【深下層】「怪児」…所属原理「甘み、蕩け」
- 【下層】「興奮猿」…所属原理「マウンツト、思う」
- 【中層】「チーム」…所属原理「力、上昇」
- 【上層】「エース」…所属原理「理、愛」
- 【最上層】「応供」…所属原理「記号、世界」

所属原理とは何のことだろうか。

先の段で、今人々が、「空想された現実」を自作し、それを背後に立てて生きていくと述べた。

ここで、それぞれの「空想された現実」があるということは、それぞれごとに、「世界が複数個ある」ということになる。

世界が複数個ある、という言い方は難しいので、最もわかりやすい形で説明しよう。

たとえば、広い草原にイヌを放すと、イヌは草原を駆け回るが、同じ草原にネコを放しても、ネコは駆け回りはしない。

それは、イヌとネコとで、所属している「原理」が異なるからだ。

あるいは、ヒヨドリが寝床を求めると、日暮里と南青山を比較して、南青山のほうがおしゃれた、という求め方はしない。

ヒヨドリには、ファッションとかおしゃれとかいう「原理」はないからだ。

それと同じように、たとえば四歳の女の子が、生クリームばかり食べているとして、一方では、四十歳のおじさんが、ビールばかり飲んでいて

それぞれは、所属する原理が違うので、おじさんからは女の子が生クリームばかり食べているのがわからないし、女の子からは、おじさんが苦い液体ばかり飲んでるのがわからない。

所属する原理が違う、ということがあって、なぜかこの単純な仕組みが、われわれにはまったく教えられていない。

たとえば「エース」に、何かサイエンスの話をしてみるとする。

たとえば、誰でも知っているように、「過酸化水素水に二酸化マンガンを加えると酸素ガスが発生する」という話をしたとする。

そこに少し、理学的な説明を加えて、

「過酸化水素水、 H_2O_2 は、その字義のとおり、もともと酸素が余分にくっついていて不安定な分子だから、そのまま放っておいても酸素ガスを放出する。そこに、触媒として二酸化マンガンが接触すると、二酸化マンガンを媒介として、酸素ガスの放出が加速されるんだ」

と教えたでしょう。

するとこのことについて「エース」は、理そのものとして、「なるほど」と、

この過酸化水素水と二酸化マンガンの反応を知ることになる。

なぜかという、「エース」の所属原理じたいが「理、愛」だからだ。

このことは、他の階層に視点を向けるとよりわかりやすくなる。

「過酸化水素水に二酸化マンガンを加えると酸素ガスが出る」という話を、中層〜最下層の人に伝えようとする、どのような工夫が必要になるか。

【中層】

「ここはテストに出ますから。ちゃんと覚えておいて、取りやすい点数を確実に取って、上位の学校に合格してくださいね。こういうことの積み重ねが、あなたの未来につながって、あなたを活躍させるのです。自分自身のために、常に全力を尽くす人であってください。過酸化水素水に、二酸化マンガンを加えると酸素ガスが発生するのです。わかりましたね」

【下層】

「マジこんなことも知らないとか、覚えられないとか、ありえないから。普通にドン引きでしょ、こんなことも覚えられないとか。リアルに小学生以下。そういう奴ってけっさよく一生バカにされ続けるよな。自分が一生、軽蔑されるバカとして生きていくとか、どんなキモチなんだろうな。マジ笑えるわ、おれそんなの考えたくもないわ、死んだほうがマジ」

【深下層】

「○○ちゃんが、いつも難しいテストで高得点を獲ってくるの、とってもお母さんの自慢です！ すごいな、○○ちゃんはすごいな。化学のこともわかるんだ、記憶力もとってもいいな、すっごく勉強しているんだね、えらいね」

あるいは、

「ステージ上に、アイドルたちが出て来て、彼女らは『オキシドール！』と言いますので、みなさんはそこで『二酸化マンガン！』と応えてください。

みなさんが大きな声で応えてくださいますと、アイドルの彼女たちから、特別なセクシーサービスがありまーす！」

【最下層】

「お話はわかりました。まったく申し訳ございません。ご不快をかけ、己の不始末をたいへん反省しております。そこで、お怒りのところたいへん心苦しいのですが、どうか免じてくださって、酸素ガス発生のことだけ、ご記憶いただければ幸いです。過酸化水素水に、二酸化マンガンを加えると、酸素ガスが発生するということだけ、どうかご記憶のほど、ご協力ください。このたびはたいへん申し訳ありませんでした」

(※謝罪するのに理由は必要ない)

経験のある人はご存じのとおり、それぞれの階層に何かを伝えるとして、それぞれの階層にある所属原理と異なる伝え方をすると、その情報は相手に受け取られない。

それぞれ、所属する原理が異なり、それぞれは、同じひとつの世界を生きているのではないのだ。

たとえば自動車一台の購入を勧めるにしても、「チーム」の人には「生活の機動力が上がりますよ」と伝えるのが有効だし、「興奮猿」の人には「いい年して車も持っていないとか、笑われる」とか、「やっぱり街中で見たら、この車はイカツい」とか煽るのがよく効く。「怪児」の人には、本当にキャンペーの女の子に派手な服を着せておくのが有効だし、「誤導」の人には、「大変申し訳ありませんでした、お怒りはごもっともながら、なにとぞ、ご契約のほうだけお願いします」と謝罪しておくがよく効く。

信じがたいことかもしれないが、「誤導」の所属原理は憤怒と悲鳴なので、その憤怒と悲鳴を肯定してやれば、わけのわからない原理によって契約書に捺印するのだ。

逆にいうと、「誤導」の人が悲鳴じみた憤怒を経ずに契約書に捺印すること

はまずないので、営業職の人は覚えておけばよいかもしれない。

ここで人々が気づかねばならないのは、先の、「過酸化水素水に二酸化マンガンを加えると酸素ガスが放出される」という話にしても、実はそれを理学として受け取っている人はほとんどいないということだ。

誰でもその「組み合わせ」は記憶している。「過酸化水素水と二酸化マンガ」という組み合わせ。けれどもその組み合わせの記憶は、多くの場合、「マリオとルイージでクッパを倒す」というような記憶と同質だ。

人それぞれ、所属している階層が違うので、同じ話を聞き、同じ作業をしても、内部的に「やっていること」はまったくそれぞれにおいて異なるのだ。

だから、たとえ理科のテストで満点を取っても、理学的な素地はゼロのままという人がいくらでもいる。

それぐらい、人それぞれ、所属している原理が異なり、それぞれ、所属している世界そのものが違うのだ。

人々は、さしあたり過去の三十年間で、さまざまな罪を重ねてきたから、所属する階層を突き落とされ、それぞれがわけのわからないままに、低層の原理に所属させられている。

過去の方法の一切が通用しなくなったのはこれが原因なのだ。たとえば新入社員を雇ったとしても、新しくやってくるのはチームではなく興奮猿や怪児だ。この興奮猿や怪児を飲み会に誘ったとしても、そんな過去のやり方は通用するわけではない。

興奮猿は、マウントを取らせてくれるなら飲み会に行くし、飲み会にいかないとバカにされるといふなら飲み会に行くだろうし、怪児は、甘みや蕩げを用意してくれるなら飲み会に行くだろう。

興奮猿に対しては、六本木の会員制バーに飲みに行くと言えはついてくるだろうし、怪児に対しては、上司が誘うのではなく、母親のようなおぼちゃん「おぼちゃんと一緒においで」と誘えばついてくるだろう。

マウントを取らせるために飲み会を用意するというのは、むろん馬鹿げている。非現実的な話だ。

馬鹿げているのだが、それが馬鹿げていると見えるようでは、まだ状況の本質が捉えられていない。

自分がマウントを取られること、マウントを取られないようにすること、それが彼にとつての現実。なのだということを忘れてはならない。

彼は、彼自身で自作した「空想された現実」を、紛れない現実だとして生きている。

だから、彼に対してチームの力や上昇を唱えたとしたら、唱えた側が非現実的ということになる。

こちらから見て、彼の現実——彼の所属原理——がまったくわからない。ように、彼から見ても、こちらの現実と所属原理はまったくわからないのだ。

今、人と人とのあいだで、おそろしい厳密さでの、「伝わっていない」という現象が生じている。

人それぞれが、自作した「空想された現実」の中を生きているからだ。人それぞれにおいて、所属する原理があり、重要なことは、人それぞれが、自分の所属する原理しか世界はないと確信しているということなのだ。

何しろ、その確信を持たないと、空想でない現実を受け容れることになってしまう。

だから今、自作の「空想された現実」、それ以外の現実はないという、無意識下の思いは激烈に頑強だ。

たとえるならば……われわれの手には五本の指がある。五本の指はそれぞれ、小指であったり親指であったりするが、小指は薬指の存在を知っており、薬指は人差し指の存在を知っているだろう。

だが現在の状況においては、たとえば小指は、「五本の指がある」と言われたとき、それがすべて小指だと思っている。奇怪なことだが、「空想された現実」においてはそうなのだ。

なぜそのような、奇怪に、歪んでいるに違いない空想を現実と思ひ込むのか。

そうしないと、自分が五指のうち「小指だ」という現実を受け容れることになるからだ。

だから自分のほか、残る四本もすべて「小指だ」という、「空想された現実」を紛れもない現実だとして生きていく。

或る一本の、優れた映画を観たとして、

【上層】…「エース」は、
作中に理と愛が表れていたことを体験し、感動し、それしかないと思う。

【中層】…「チーム」は、
名作には独特の力があふれていて、励まされるわと感じ、それしかないと思う。

【下層】…「興奮猿」は、
本当に名作だよ、とコメントし、絶賛して他人にも勧める、それしかないと思う。

【深下層】…「怪児」は、
こうして、いい映画を観ているのは、割と好きです、と漏らし、それしかないと思う。

【最下層】…「誤導」は、
映画を観ながら、ぶつくさ、「こんなの○○したらいいじゃない」と文句等を言い、それしかないと思う。

今人々は、上位階層の原理を「学ぶ」という機能の一切を失っている。それは、自分が「空想された現実」を設定していて、その他の現実を認めることは、空想でない現実の存在を認めることになるからだ。

だから、たとえば「チーム」は、「エース」が観た映画の理と愛について、なんとかしてねじ曲げて、「力があって励まされるっていいことよね」と言い換える。

そこに「興奮猿」が乗っかって、「マジ名作だったよね」とマウンツの原理にすり替える。

ここから先、もしそれぞれが、たくさん映画を観たいと望んだとき、そこから「学ぶ」（上位階層の原理を手探りする）という機能はすでに失われているので、

【上層】…「エース」は、
もっと作中の、理と愛を深く読み取り、受け取れるようになりたい。たぶん見落としがたくさんある。

【中層】…「チーム」は、
もっとたくさん、力と励ましのある映画を観て、吸収し、力にあふれたわたしになりたい。

【下層】…「興奮猿」は、
映画に詳しくなあって、その点では誰にも負けない奴、とかになろうかなあ。マジの評論家とか。

【深下層】…「怪児」は、
専用ルームとか用意して、ソファとかサラウンドとか完備して、思いっきり浸れるようになりたいですね。

【最下層】…「誤導」は、
誰だって、こうやって映画ばかり観て、優雅な暮らしをしていたいでしょ。誰だってそう。

と望むことになる。

くれぐれも、今われわれが見なくてはならない焦点が、これらの階層が、連続しているのではなく断絶しているということだ。一つの層は、他の層の存在を認めていない。

他の層の存在を認めたとき、それは空想でない現実を受け容れることになってしまふからだ。

われわれは今、「空想された現実」から分類された、それぞれに孤立した所属階層同士として、互いに何かが通じ合っていると誤解してはならない。

もう、人と人のあいだには、何も通じ合っていないのだ。

特に、世界愛の一部が芽生えている中層／最上層はまだしも、世界愛が皆無のままの、下層／最下層においては、生涯のうち誰かと通じ合うということとは一度もない。

本当に一度もないので、そういうものだとすることを、機械的に理解しておく必要がある。

今、人々のあいだに、いかなる所属原理の適合と、不適合が入り乱れているか、その視点をもって万事を観察することで、周囲に起こっているすべてのことを分析的に理解することができる。

人それぞれ、善性と努力をもって、健全に生きていくように見え、あちらこちらには共に生きる仲間やグループが成り立っているように見えるが、それは残念ながら見せかけた。

特に、下層以下（興奮猿以下）に所属している人は、残念ながら、「あなたのことを友人と思っている人なんてひとりもない」ということを、正式に断言せねばならない。

さらに、深下層以下（怪児以下）の人は、友人どころか、直接に「気持ち悪い」というのが現実だ。

空想でない現実を、機械的に理解することで、われわれはこの先の未来のあちこちで、最善の判断と対処をすることができるだろう。

（なお、あえて最上層「応供」についてはほとんど触れなかった。それはわれわれが一般的に想定する必要のないレベルの存在だ。われわれはエースになれればまず十分だろう）

余談、

「平等」はあくまで

生きものとして

余談だが、われわれにとって「平等」とは、あくまで生きものとしての平等性であって、存在としての平等性ではない。誰でも生きていくべきだし、粗雑に死んでよいわけではない。食パン一枚を食べて生きられるぶんは誰だって生きものとして同じなのだから、余っている食パンがあるなら他の誰かが生きられるために分け与えればよい。生きものとして生きていくことについては、相互は当然に助け合うべきだ。隣人に食パンを分け与えず、隣人は死んで食パンは腐ったということでは誰も利益を得ていない。生きものとしては「なるべく」平等であるべきだから、たとえ誤導や怪児であれ、災難に遭ったとき無事に脱出できたということならひたすらよろこばれるべきだ。だがその平等性をもって、存在を平等とまで言い張ることはできず、ここを混同することはひたすら不快な不毛の問答しか生まない。

わかりやすく言うならば、われわれは一泊十萬円のホテルと、一泊1280円のマンガ喫茶とで、そこにいるスタッフのレベルが同等であることを認めない。一泊十萬円のホテルのほうが、スタッフはハイレベルであることを求めるはずだ。仮に「いいえ求めません」と言ったとして、実際にそんなホテルがあったとしたら、そのホテルは客が来なくなって廃業するはずだ。小學生を多数殺害してなお悪態をついた通り魔・宅間守と、マハトマ・ガンジ

ーを「平等」といって同列の存在に並べるのは無理がありすぎる。むろん生きものとしては同じ人間であるには違いないが。

「平等」というのを、「誰もが同じ」と強引に言い張ることにしてしまうと、それはつまり「誰でも同じ」だから「誰でもよい」ということになり、話は初めから破綻していることになる。たとえば女性にとって、「あの人と海辺を歩きたい」というとき、その「ある人」と呼んでいる男性は、誰でもいいという存在ではないはずだ。世の中を罵倒しながら女性に暴力を振るうアルコール中毒者のマザコン中年男とわざわざ海辺を歩きたいとはどうしても思えないだろう。男だって、すべての女にひらひらのスカートを穿いてくるとターンしてほしいと思っているわけではないし、男同士だつてすべての知人に対して「あいつとまた酒を飲みたい」と思えるわけではまったくくない。当たり前のことだ。

けれどもこのごろは、この当たり前のことさえ、「空想された現実」でねじ伏せようとする向きがあり、その醜態には嫌悪を超えて狂気を感じる。先に述べたように、興奮猿以下に愛はありえず、怪児以下は想像を絶するほど「気持ち悪い」のだが、この現実を「空想された現実」でなんとかねじ伏せようとする勢いがあるのだ。その勢いにはどうしても狂気を指摘せざるをえない。

たとえば所属原理が「甘み、蕩け」であった場合、彼がどのように筋力トレーニングをし、どれだけ高価な服を買い、どれだけ最先端の美容院に行つて髪の毛の色や形を変えたとしても、所属原理が甘えと蕩けである以上、全身のヒステリーとはみ出した自己愛は、「気持ち悪い」という感触しか与えない。それは印象ではなくて直接の感触だからだ。けれども、今それぞれが「空想された現実」を本当に現実と思ひ込んで生きているので、自分のイメージを変えれば「空想」も変化して、それによって現実も変えうると感じているところがあるようなのだ。

空想でない現実においては、そういった都合のいい現象は起こらない。興奮猿がリクルートスーツを着たとして、そうした衣裳を着るとイメージとし

て「力、上昇」の原理に転属できたような錯覚を起こすのかもしれないが、そんなことでチーム階層の友人を得ることはできない。所属している原理が違っているので、いくら絡まれても話は噛み合わず、存在としてうつつうしいだけだ。

まったく、本当の本当に、自分による「空想した現実」だけが現実になっているので、何かとっておきの自己改革が用意されているように思い込んでいるふしがあり、それに付き合わされる周囲は多大な迷惑をこうむっている。そうした安易な方法で自己変革など為されないどころか、おおむね自分の所属している原理からは、一生離れられないというのが現実なのだ。若いうち「マウント」を原理とした興奮猿は、その後数十年経って老人になっても、やはり所属している原理は「マウント」のまま。ただ元気がなくなり、いろいろ痛い目にも遭ってきたので、勢いがなくなっただけで、その老いさらばえた全身の中に、けっきょく機能しているのは「マウント原理」だけだということになる。若いころ気持ち悪かった奴は晩年になっても気持ち悪いまま。所属する原理が転属されるケースを僕はほとんど見たことがない。

「平等」というのはあくまで生きものとしてのことであって、存在のことではない。つまり、麗しき人と海辺を歩く愛の存在に、誰もが平等になれるわけではない。ほとんどの場合、「あなたはそんな人にはなれません」と断言するほうが現実を適切に指摘するだろう。どれだけ服と髪型と体形を変えたとして、麗しき人と海辺を歩く愛の人になんかなれない。今さら何を言っているのだ？ 「空想された現実」はいくらでも励ましをくれるかもしれないが、空想でない現実には根拠なしに人を励ます動機など持っていない。

それでもなお、われわれは、生きものとしての平等を失ってはならない。その平等を見失うと、想像していたことの逆を、人々は思いがけずやっってしまうだろう。つまり、海辺を歩いている麗しき愛の二人が、餓えていたときに、余っていたパンを分け与えることをせず、嫉妬から、

(飢え死にしろ！)

という行動を取ってしまうということだ。

存在として不平等を突きつけられてきた苦しみから、生きものとしての不平等で報復を為し遂げようとしてしまうだろう。

実際にわれわれに課されている「平等」への追求は、われわれが夢想していたような甘い正義の果実などではなく、われわれにとって苦みのほとばしる厳しい試練だ。単に金持ちが貧乏人にパンを分け与えるということなら容易なことだし気分もいい。だがみずぼらしいブス女が、麗しい女にパンを分け与えるというのはとても苦しく容易なことではない。だが本当に「共に生きる」というのはそういうことだ。そのときこそ本当に、ブス女から麗しい女への真の宣戦布告が為されている。

導き、学びと誘惑

先に示した六階層には、まだまだ注目すべき性質がある。階層間の性質を機械的に知ることによって大きな利益が得られるだろう。

- 【最下層】「誤導」…所属原理「憤怒、悲鳴」
- 【深下層】「怪児」…所属原理「甘み、蕩け」
- 【下層】「興奮猿」…所属原理「マウント、思う」
- 【中層】「チーム」…所属原理「力、上昇」
- 【上層】「エース」…所属原理「理、愛」
- 【最上層】「応供」…所属原理「記号、世界」

原則、それぞれの階層は、他の階層があることを知覚できない。だからこそ、それぞれの所属原理において、人は世界をそれ限りと誤認してしまう。

「空想された現実」を現実そのものとすり替えられてしまうのもそれが理由だ。原則、われわれにとって他の階層による世界は存在していない。

ただし、隣接する階層はそれぞれ、上方隣接であれ下方隣接であれ、別の階層があることを教え、そちらに誘導することができる。これを「導き」という。

この「導き」のうち、上方へ導くものを一般に「学び」といい、下方へ導くものを一般に「誘惑」という。

上方へ導かれ、学び尽くした先には当然「応供」があり、下方へ導かれ、誘惑されつくした先には当然「誤導」がある。

それぞれ隣接する階層は、そのように「導く」という形でアクセス可能だが、階層が二つ以上離れた場合、相互は通常アクセス不能になる。つまり、たとえば「エース」は「興奮猿」を導けないし、「怪児」は「チーム」のことがまったくわからない。

平易にいうと、それぞれの階層は、導きがあれば隣の階層は「まだわかる」のだが、二つ隣の階層はどのようにしても「まったくわからない」になる。

人は、一つ上のことはまだ学びうるが、二つ上のことは学び得ない。

また、人は一つ下のことにはまだ誘惑されうるが、二つ上のことには誘惑され得ない。

この性質を、機械的に見ていくことで、大きく有用な知見が得られるだろう。

この六階層の分類はたいへん有用なものだ。

【最下層】「誤導」において、たとえばカルト宗教にハマっているおばさんは、蕩けるような母子関係については「まだわかる」と感じる。オラついている人たちについては「まったくわからない」。ラップ音楽やヒップホップについては顔をしかめるしかない。

【深下層】「怪児」において、たとえばマザコン引きこもり男において、「バカにされたら殺したくならないか？」ということは「まだわかる」と感じる。また、カルト教団で偶像を拝み倒している老婆たちに対しても、やはり「まだわかる」と感じる。

みんなで協力してひとつのゴールまでいこうぜ、ということについては「まったくわからない」。顔をしかめて「うーん、協力しろと言われたらしますけど」としか言えない。

【下層】「興奮猿」において、

たとえばオラついている陽キャにおいて、「部活動でもやれば？」というのは「まだわかる」と感じる。また、アニメを観て「癒される」というのも、やはり「まだわかる」と感じる。

ブラックホールの研究者が観測結果を報告していることについては「まったくわからない」。顔をしかめて「そんなの研究してもさあ、何の役にも立たなくね？」と言うしかない。また、老婆がお盆のしきたりに病的にこだわっていることについても「まったくわからない」。「まじうっざ」と顔をしかめるしかない。

【中層】「チーム」において、

友人の研究に協力するために図書館に調べ物に行く人において、「人間の腕の力は手のひらの側より手の甲の側のほうが強い」と解き明かされることは「まだわかる」と感じる。また、「けっきょく負けたくないよね、負けること自体がイヤだわ」ということについても、やはり「まだわかる」と感じる。

「素数に規則性があるって恐ろしいよな」ということについては「まったくわからない」。顔をしかめて「なんかすごいですよね数学者って」と言うしかない。アイドルの○○クンに対して「キヤー」となることについては「まったくわからない」。「うーん、わたしはちょっと」と苦笑いするしかない。

【上層】「エース」において、

エジプト神話については、「あれ？ なんかちょっとわかる」と感じる。また、「みんなでひとつの絵を描きたい」ということについても、やはり「それはちょっとわかる」と感じる。

SNSで「ドバイに行ってきました」と自慢を投稿することについては「まったくわからない」。「は？ せめて自撮りじゃなくドバイの景色を載せてよ」と口を尖らすだけだ。

このように、それぞれの階層は、隣接する階層については、導きがあれば「まだわかる」と感じるができる。それによって、上方階層を「学ぶ」こともできるし、下方階層から「誘惑」される可能性もある。

この仕組みにおいて、人それぞれは、自分の「所属」している原理と階層を明確に把握するのがよい。注意すべきは、自分が触れられる原理と、自分の所属している原理は異なるということだ。

たとえば、過去に「チーム」階層に所属していたとき、理や愛に触れることができるようになったが、その後転落して現在は「興奮猿」階層に所属しているという場合がある。この場合、引き続き理や愛を「学ぶ」ことが出来る気がするが、現在は階層が二つ離れているので無理だ。

あるいは、後の段で話すけれども、二つ以上離れた階層から「憐れみ」をかけられ、そのときに二つ以上離れた上位原理に触れることができるようになった、という場合もある。けれどもこの場合も、自分が触れられる原理がただちに自分の所属する原理ではないため、思い違いのないよう注意する必要がある。

また、それぞれの所属原理と階層があったとして、その階層に所属できれただちに盤石というわけではなく、その階層において確かな経験と実績を積み重ねる必要がある。積み重ねの薄い者は、逆に階層の上位転属がしやすけれども、そのぶんいつでも容易に転落するリスクも抱えることになる。

それぞれが、自分の所属する階層を明確に見定め、現在の階層で為すべきことと、次に往かねばならない先を理解することで、人々は確実な状況分析と適切な自己決定を得られるだろう。

◆「憐れみを乞う」こと、「誘惑」こと

このように話が進めば、誰しも己の所属する階層を上方へ転属させたいと

望むはずだが、ここで上方転属を望むのに、ひとつの構造的矛盾がある。

たとえば「チーム」階層が「エース」階層になるとして、導きがあれば「チーム」は「エース」から学ぶことができるはずだが、実はそれだけではチーム階層者はエース階層者になれない。学ぶことはそれだけで転属を約束してはくれない。

なぜかというところ、ここでは二つ上の階層を考える必要がある。

チーム階層においては、応供階層のことは「まったくわからない」はずだ。エース階層においては、応供階層のことは「ちょっとわかる」「学び」の対象のはず。

チーム階層は、二つ上の応供階層のことが「まったくわからない」ので、そのまま応供階層が「ちょっとわかる」エース階層に転属することはできないのだ。

このことがあるので、いくら導きがあっても「学ぶ」としても、学ぶこと自体は無為ではないにせよ、階層そのものの転属は起こってくれない。

「興奮猿」が、いくら「チーム」のことを学んでも、彼の所属はいつまでも「興奮猿」のままなのだ。

「力、上昇」という原理に触れて、その原理を学びはするが、彼の所属する原理はやはり、「マウント、思う」のままだ。

この構造的閉塞をどのようにすれば突破できるだろうか。

結論からいえば、話は簡単で、人は一つ上の階層からは「学び」、二つ上の階層には「憐れみを乞う」必要があるのだ。この二つが同時に為され、二つともが一定量に到達して、初めて人は所属階層を転属できる。

たとえば、

カルト宗教おばさんに、ヒップホップが踊れるわけがない。憐れみを乞い、憐れみをかけてもらうしかない。

オナニー趣味に耽っている男に、協力のかけ声が出せるわけがない。憐れみを乞い、憐れみをかけてもらうしかない。

オラついている肌荒れ男に、産業デザインができるわけがない。憐れみを乞い、憐れみをかけてもらうしかない。

文化祭実行委員に、エジプト神話が視えるわけがない。憐れみを乞い、憐れみをかけてもらうしかない。

引き続き、機械的に考えることが有効で、二つ上の階層のことは「まったくわからない」のだから、まったくわからないまま「憐れみを乞う」しかないのだ。その憐れみを乞う態度が真実のもので、憐れみをかけてもらえることができたならば、そのまま二つ上の階層へ行けるわけではもちろんなく、「学び」の量が足りたとき、一つ上の階層に転属することができる。

つまり、

カルト宗教おばさんが、ヒップホップを踊れるようになるわけではないが、なぜかある日、風呂に入ったとき、湯の香りが鼻腔に染みて、全身が蕩けた。

オナニー趣味に耽っている男が、協力のかけ声を出せるようになるわけではないが、なぜかある日、街のゴロツキに通りすがりに「死ねよ」と言われたとき、恐怖感が起こらなかった。

オラついている肌荒れ男が、産業デザインをできるようになるわけではないが、なぜかある日、先輩が引越しをするのに、当然の協力と荷物運びをしている自分に気づいた。

文化祭実行委員が、エジプト神話を視えるようになるわけではないが、なぜかある日、「あなたが作ったレジュメはなぜこんなに見やすいの、すごいわ」とみんなに言われた。

というふうに階層転属は起こる。

一つ上を学び、二つ上に憐れみを乞うことで、その双方が一定量に到達すると、人はいつのまにか一つ上の階層に転属しているものだ。

この階層上昇が、理想的にいく場合、たとえば、

カルト宗教おぼさんの息子が、初め目つきのおかしい子供だったのに、いつのまにかマンガを読んで素直に笑うようになり、いつのまにかいじめっ子に反抗するようになり、いつのまにかクラスの催し物では率先して立ち働くムードメーカーになり、そのうち言われてもいない勉強と発見を自分でするようになり、青年の風貌を具えたころには、女性から「あなたは眼差しが違う、あなたは自分の世界を持っているのね」と惚れられるようになった。彼はそのとき、「すべて、色んな人に助けられてここまで来られたんだ」と言った。

というようになる。

このように、機械的に考えれば、人が階層を上方に転属することは簡単だ。だがその簡単というのは、シンプルという意味であって、容易だという意味ではない。

大前提、われわれは自分自身を「平等」の一人だと捉えているので、まかりまちがっても、自分が誰かに「憐れみを乞う」などという発想は持っていない。

「憐れみを乞う」というと、キリスト教のフレーズとして、「主よ、憐れみたまえ/Kyrie eleison」がよく知られているが、今十数億はいるだろうキリスト教徒にしたって、そのように憐れみを乞うことができるのは、あくまで正統教会がその権威と伝統においてイエスキリストの偉大さを担保しているからにすぎない。

十数億はいるだろうキリスト教徒のすべてが、もし存命中のイエスキリストに直接出会ったとして、全員がただちにその膝下にひれ伏して憐れみを乞うたとはとても思われない。

ほとんどの場合、「やせっぽちの説教おじさん」を見て笑い、「でもあの人、割とムードだけはあるよね」「わかる」「聖人っぽい」とネタにして笑い飛ばすのが関の山だろう。

あるいは、いつの時代にもいるスピリチュアルかぶれの人たちが、ムードに耽溺して、ありがたがる自己陶醉用に使うぐらいだろう。

「憐れみを乞う」というような、芝居がかったものが好きな人は一定数いるだろうが、芝居がかったそれではなく、真に憐れみを乞うということは、おそらくわれわれの一生において一度も経験されないだろう。

われわれが知っているのは、ピンチに際して「救助を乞う」というところまでだ。遭難したり、ケガをしたり病気をしたり、災害に遭ったりするとわれわれは「救助」を乞う。救助されれば最大限にお礼をいい感謝もするだろうが、そうしたわれわれの内に「憐れみを乞う」「憐れんでください」という発想はやはりない。

われわれは、救助要請までは知っているのだから、ぎりぎり、憐れみを「要請する」ということまでは可能かもしれない。けれども、憐れみを「乞う」と「要請する」のではあまりに意味が異なり、実際問題としてはわれわれにとって憐れみを乞うというのはほとんど不可能事に近い。

単なる常識や、あるいは直接のメンツの問題としても、カルト宗教のおぼさんがヒップホップダンサーに「憐れみを乞う」ということはありえない。まして、本当に憐れみを乞うとしたら、ヒップホップダンサーたちは、ナゾのパバアを思い切りバカにして笑うだけだろう。とはいえ、機械的に考えれば、憐れみを乞うことはそれで合っているのだ。憐れみを乞うとすれば、そのときおぼさんは「憐れ」でなくてはならない。思い切りバカにされて笑われて、なお憐れみを乞うているおぼさんはまさに「憐れ」だろう。

だがそんなことに耐えきれぬわけがない。受容できず、おぼさんは「もういいです！ あんたたちなんか！」と屈辱の怒号を発さずにはいられないはずだ。

こだわりのオナニー趣味に耽っている男が、新規開店チームや撮影チームに「憐れみを乞う」わけがない。どう考えても先方から「なんです？ この気持ち悪い人は」と汚物のように扱われるだけだろう。それでもなお憐れみを乞い続けるとして、内心で屈辱の炎が起らないというのはほとんど不可

能だ。そこで屈辱の炎が上がるということは、「自分は憐れな者ではないはずだ」という思念が勝っていることになる。オナニー男は頭を上げて、「もういいです、こんな面白くもないこと、わざわざやらせてもらおうと思えません」と言い出すに違いない。

オラついている肌荒れ男が、産業デザイナーに憐れみを乞うということもありえない。そもそも憐れみを乞うような者なら初めからオラついたりしていいだろう。「きみには無理だから」としか言われないうし、それでも憐れみを乞い続けるとしたら、それは彼がこれまでオラついで生きてきた時間のすべてを否定するようなことだ。それよりはどうか考えても、いつもどおり目の前の什器でも蹴りつけて、「コラァ！ 調子乗ってるんじゃないぞ」とでもすごんでいるほうが、彼は救われた心地がするだろう。

文化祭実行委員が、急に詩人に向けて憐れみを乞うというのも無理がある。忙しい身で、いつものチームに帰れば、自分を必要としてくれる人はいくらでもいるのだから、詩人のような何の役にも立たないことをぶつくさ言っているヒマ人に対し、憐れみを乞うなどというむなししいことをいつまでもやっている理由がない。むしろ詩人に対し、「あなたも少しは直接人の役に立つことでもしたら？」と言いつけて帰りたいだろう。

このように、実際に考えると、われわれは二つ上の階層に直面したとき、憐れみを乞うどころか、実際には「罵る」「誇る」ということを選択するだろう。

機械的に考えると、こうして二つ上の階層に対して、実際には「誇る」場合、階層の転属は当然のごとく逆方向へ作用する。

つまり、自分の知らないところで、二つ下の階層がばっくり門を開き、一つ下の階層から、「誘惑」が有為な干渉力をもって呼びかけてくる。

こうして、かつては力と上昇に属していた誰かは、いつのまにかマウントにだけ反応する興奮猿になり、その興奮猿はやがてアニメやアダルトコンテンツに耽溺する怪児になってゆく。

彼がやがて、下方への導きの果て、「誤導」に行き着くのは時間の問題だろう。

こうして、上方転属の方法は簡単で、シンプルだが、実際には困難を極めている。

導きがあり、一つ上の階層とその原理を「学ぶ」ということ、それだけでも幸運に属することだが、二つ上の階層に「憐れみを乞う」ことができるかという点、このことは急に不可能事じみる。

なぜならば、われわれは誰も、自分が憐れな者だとは思っていないからだ。これでやっとこの話はひとつの円環を迎えるだろう。

われわれは自分が憐れな者だという可能性を認めることができない。

「現実を受け容れられない」からだ。

空想でない現実において、われわれはひよつとすると、本当に「憐れまれるべき者たち」なのかもしれないのだが、そもそもその現実を受け容れないために、すべての力動作用は始まったのだった。

それが今、「現実を受け容れられない」から、「憐れみを乞うことができない」という、より具体的な視認に変わったただけだ。

現代人は現実を受け容れられない。

より具体的には、現代人は、憐れみを乞うことができない。

それどころか逆、誇ることでできなくなった。

それでわれわれの日々は、機械的に、なぜか誰もが下方に転属していくばかりの日々になった。

そうしてわれわれは、われわれのさらに受け容れられない現実を作っていた。

「共感に訴える」という時代について

通信テクノロジーが進化し、ウェブ上に「いいね」やリツイートシステムが導入されて以降、われわれが目にするものは変化していった。

われわれは今、多くのウェブコンテンツを消費しているが、ウェブコンテンツの評価はある意味民主的であって、多数のユーザーから投票を受けたものがピックアップされる仕組みになっている。

そのシステムは民主的であるので、民主政治と同じように、多く「共感を得たもの」が評価され、勝利するシステムになっている。

政治家が選挙に当選するためには、有権者の「共感を得る」必要があり、いかに優れた人間でも、有権者から共感を得られなければ、まず政治家になることができない。

今、YouTubeで検索すると、「シルヴィ・ギエム」で最も数多く再生された動画の再生回数は80万回再生ほどだが、今度は「踊ってみた」で検索すると、上位動画の再生回数は数千万回に及んでいる。

「いいね」を意味するサムアップのカウントは、「踊ってみた」では十数万カウントに及ぶものもあるが、シルヴィ・ギエムのほうは一千もいかない。

もちろんこれは、国籍の問題もあるし、単に知名度の問題もある。「マイケルジャクソン」で検索すると、再生回数は数億に及んでおり、サムアップも数百万カウントあるから、数値的に比較にならない。

けれども、知名度ということでは、「踊ってみた」にリストアップされ

る人たちも、もともとは知名度はなかったはずだ。

あるいは、再生回数とアカウント名はよく知られているけれども、なおそこに「知名度」はないのかもしれない。

それでも、今人々は実際に、「踊ってみた」というコンテンツ群を、さしあたりそれが存在するということについては知っているのだ。

われわれはいつのまにか、手元の端末に、「多数から共感を得そうなもの」のリストが、毎日更新されて突きつけられてくる、という暮らしをしている。

同時に、ニューストピックも、共感ないしは多数に「反感を起こしそうなもの」がピックアップされ、リスト化されて突きつけられるようになった。

われわれは別に、ひねくれ根性で物事を見ているわけではない。

「共感を得られそうなもの」が目の前に示されると、ごくふつうに、当たり前前の共感を覚えるだろう。

「反感を起こしそうなもの」に対しては、やはりごくふつうに、当たり前前の反感を起こすはずだ。

だがわれわれにとつて、何かに「共感する」「反感を覚える」ということは、そこまで重要なことだったろうか？

たとえば土日に仕事が終わりのオフィスワーカーが、月曜日の朝に憂鬱を覚える。

金曜日にやり残した仕事と、今日になって明るみに出るミスについて、

「また課長にぶつくさ言われるだろうな」

という予想が立ち、ますます憂鬱になる。

そういうことは、多くのの人にとつて共感可能だろうが、それに共感を覚えるということは、そこまで重要なことだったのだろうか。

一方で、たとえばムツゴロウこと畑正憲氏は、当時まだ渡航が開拓されておらず、国際的にも危険が伴う情勢だった時代、チベタンマスタフ犬に出会うためにというだけの理由で、東チベットに入国したことがある。

そういうことはまったくわれわれに共感を呼ばない。われわれは、月曜

日の朝に憂鬱を覚えるようには、「チベタンマスタフに会うために東チベット

へ入国しよう」とは発想しない。

だがわれわれはそういったものこそを、重要なものとして必要としているのではなかったろうか。

月曜日の朝に憂鬱を覚えるというのは、オフィス勤務したことがある者なら誰だってわかっている。

わかっているからこそ「わかるわかる」と共感を覚えるのだが、そこまで十分にわかっているのならば、もう改めてコンテンツを通して知り直す必要はないのではないか？

仮にここに、百体の消費ユニットが存在したとする。

百体のユニットは、すべて階層「興奮猿」に所属していたでしょう。

興奮猿の所属原理は、「マウンツ、思う」だから、百体のユニットは、「おれたちの勝ち」とか、「マジ負けたっす」とか、「誰にも負けない〇〇になる」とか、「超ブルーだわ」とか、そういったタイトルに誘引され、そのコンテンツに共感し、百の「いいね」をつけるだろう。

また、興奮猿にとって、導きがあれば「チーム」は「まだわかる」と感じられるし、「怪児」も「まだわかる」と感じられるのだった。

だから、百体のユニットは、「みんなでイカダを作ってみた」という動画に、二十の「いいね」をつけるだろうし、一方ではアニメやアイドルユニットが唄い踊り、甘く蕩けるような感触を覚えるものについても、二十の「いいね」をつけるだろう。

一方で、百体のユニットは、やはりシルヴィギエムのボレロには、ひとつの「いいね」もつけないだろう。

こうして考えると、共感カウントを基準とした現在のピックアップシステムは、共感の割合という以前に、そもそも「共感しうるユニット数」そのものに依存しているということになる。

現在の、共感しうるユニット数そのものをターゲットにするならば、たとえば先のムツゴロウ氏による東チベット入国の映像も、

「マジ危険！ チベタンマスチフに会いたくて東チベットに渡航しましたが

何か？」

というようなオラついたタイトルにせざるをえない。

もともとのタイトルは「ムツゴロウのゆかいな動物図鑑／大型犬のルーツ・チベタンマスチフ」だが、このタイトルはまったく共感を呼ばないだろう。

「空想された現実」において、ある者は甘く蕩けたく、ある者はマウンツを取りたく、ある者は吸収して自分をパワーアップさせたいのであって、誰も

「チベタンマスチフに大型犬のルーツがある」ということに興味はない。けれども、こうして分析してみると、実はこの興味のないこと、共感の対象でないものこそが、本来は必要なものだったのでないか。

われわれはいつのまにか「共感漬け」にされてしまった。

このレベルにおいての「共感」は、われわれにとって、脳みそにまったく負担がない。

なぜなら、前もってわかっており、共感「わかるわかる」だからだ。

わからないことに向き合わされているわけではないので、脳みそをはたらかせる必要がない。

そんなことをしているうちに、本当に脳みそがはたらかなくなった。

たとえばこんなことがある。

「興奮猿」に対し、僕が「電池の仕組み」を話すでしょう。

僕が、「電池の仕組みは……」と話し出すと、興奮猿は話を聞く。こういうとき、たいいて僕の話は適切で流暢で、聞いている者を圧倒的に楽しませるものだ。むつかしい化学式など使わず、必ず彼の持っている知識だけで理解できるように工夫して話す。

だから彼は何度でも僕の話を聞くのだ。

けれども彼は、何十回聞いても、電池の仕組みを理解しない。

脳みそがはたらいていないからだ。

なぜ脳みそがはたらかないかというと、共感漬けにされた脳みそは、初めから最後まで「共感」を探しているからだ。

自分の共感において「わかるわかる」ということに、反応する、ただそれ

だけの生きものになっている。

だからたとえば、「ポケモンの……」というたぐいの話をする、そのことについては、彼は僕が話を話したかをただちに理解する。

「リザードンのルーツはヒトカゲだよ」ということは理解するが、「大型犬のルーツはチベタンマスタフだよ」ということについてはいつまで経っても理解しない。

実際、子供が「ヒトカゲをリザードンに進化させました！」とアピールする動画のほうで、ムツゴロウ氏の東チベット探訪の映像より「いいね」がつきやすい。

何もかもが共感狙いでアップロードされているのがわかるだろうか？

人々は今、そういう「共感漬け」の、「共感に訴える」というシステムの中を生きている。

多くの人にとって、本当に必要なものは、むしろそうした共感にまったく無関係のものなのだろうが、そういった本質に関係なく、ただテクノロジーの包囲状況として、われわれには共感モノしか与えられない。

本当に必要なものは、「わかるわかる」ではなくて、自分では出てこない発想、自分ではたどりつけない境地、自分では支えきれず忘れてしまう愛や情熱だろうが、そういったものは手元から遠ざかって書庫に追いやられ、代わりに共感モノばかりが手元に毎日更新されて届くのだ。

もし、当時の東チベットに入国して、本当にチベタンマスタフに出会ってトラブルもなく帰ってきたムツゴロウ氏のそれを冒険と呼ぶなら、現代の大学生には何の冒険もないということになるだろう。

それが現実だと僕は思っている。

僕はそういう現実が知リたかったし、そういう現実を知ってわくわくした。

月曜日の朝に憂鬱になるというのは、リアリティがあるが、そのリアリティはただの「心当たり」でしかない。

自分の心当たりがそのままこの世界の現実というわけではない。

きつと、空想でない現実、多くの人にとって心当たりのない現実だ。

「共感」が人をますます現実から遠ざけていくだろう。

僕はそうした「共感に訴える」やり方を、すでに過去のものとして追放したいと思っている。時代おくれという嘲弄と共に。

それぞれの際層の、 性質と現実

現代人は現実を受け容れられない。

それは、何も珍しいことではなく、過去にもあった出来事だから、現在の人々にもあるということだ。

たとえば、よく知られているとおり、日本は第二次世界大戦末期、本土空襲を受けていて明らかに敗戦模様なのに、新聞各社は日本軍が大戦果をあげているというウソを報道した。いわゆる大本営発表だが、どうごまかしてもそれはただのウソに決まっている。

ウソを報じるしかなかった状況というのは理解できるが、それにしても、それはむしろ「現実を受け容れられない」という現象がそのようにして起こるのだという、歴史的な資料なのだと思う。

当時の人々に、「こりゃあ敗戦ですな」と言ったとしたら、ブン殴られたのかもしれないが、僕はそうした敗戦を、屈辱的だと思っていないわけではないし、悔しく無念だと思っていないわけではない。

心情と現実とは別だ。

そして僕は、自分の心情より、現実のほうを愛していたいと思う。

まして、今、目の前に、巨大な悲劇があるわけでもないのだから。

人は色んなことにリアリティを感じて生きているが、リアリティというのは一種の心情にすぎず、リアリティは現実そのものではない。

「ダイエットしているつもりなのに、つい、夜中になるとスナック菓子に手

が出てしまう」というようなことは、「わかるわかる」といって、心当たりから共感が得られるのだが、そのリアリティは、まさに心情と共感のものであって、この世界の現実そのものではない。

たとえば、かつて詩聖と呼ばれた詩人タゴールがインドに存在し、タゴールはアインシュタインと宇宙について対話し、タゴールが死去すると人々は巨大な葬列を為して詩聖タゴールを弔ったのだが、そのことに心当たりがないからといって、詩聖タゴールの存在は非現実ではなかった。

今人々にとつて、現実味のないことは、現実ではないと錯覚されているのだろうが、現実味というのは一種の催眠術にすぎず、だからこそ自前で「空想された現実」を持つこともできる。

女性が鏡の前で、「イケているわたし」みたいなことを、「空想された現実」として演出し、服装ともどもそれを現実と信じて外出するのかもしれないが、もし現実を受け容れて進むことを求めるなら、僕はすでに多くの人に、「あなたには何の魅力もない」ということを明言しなくてはならない。

そうするとやはり、大本営発表に言いがかりをつけた者のように、ブン殴られるのだろうか。

もちろん、こうして述べる以上、僕自身も、「何の魅力もない」と言われることを引き受けていなくてはならない。

とはいえ、そこに作為や悪意を混ぜるのはなしだ。

僕は心情と関係ない現実の話がしたい。

すべてのことは、あくまで信頼関係の上でということになるだろうが、その信頼関係を目指すものとして、僕はたくさんの男性に、

「あなたには何の面白さもないし、あなたが思っているようには、頭のいい男性という印象も受けない」

と言わねばならぬだろうし、また多くの女性に、

「あなたには何の魅力もないし、何の香りもしないし、人としてのやさしさがあるとも感じられない」

と言わねばならない。

もちろん、僕自身がまったく同様のことを言われたとしても、そのときはそのとおり、「そうか」と引き受けて進むしかないだろう。

面白くないとか、魅力がないとか、そんなことならずいぶんマシだと思わないといけない。

階層として、興奮猿、怪児、誤導の人々に向けては、

「ぼっと見ただけでも、薄気味悪い。誰も近づきたくないし、こっちに来ないでくれと全力で願う対象だ。なんでそんなヤバイ顔で市中を歩けるのか不思議なほどだ。生理的に、脳みそが粟立つような不快感があつて、こちらの神経が半日ぐらいやられてしまう。あなたに接触した日は一種の不幸な日だ。

それでいて、当人のレベル設定は、平均より割と高めなのだと思う。だからぬけぬけと厚かましいし、それでいて、他人に対して何ら感謝するとか労るとか気を利かせるとかいうことがない。そういう機能そのものがないのだと思う、見ていてミエミエにそうだとわかる。でも本人だけは決して認めないので誰もそのことを指摘はしないだろう。本人だけが、自分も他の周りの人と同列だと思っていて、むしろちょっとでも悪く扱われるとすぐに気分を害する。プライドと自尊心と自意識だけは異様に高い。何か根本的に痴愚と言いたくなるような、頭の悪さ、頭の弱さ、頭の狂い方を感じる。まともな経歴を何一つ積んでできていなくて、その口からは清潔な「はい」の一言が出ることは決してなくて、いつもぶつくさ反論だけがすばやくつぶやかれるように出来ている。そういうスタイルで長いあいだ生きてきたんだろうなと思う。

これまで自分のピンチが救済されるべきという要求だけを百パーセント考えてきた顔だ。誰かのピンチを救済するというようなことは脳裏をかすめたことさえない。ひどくおぞましい全身をしていて、ひどくケンカを売っているような不気味な顔をしていて、岸壁に捨てられた魚みみたいな目をギョロっと剥き出しているのだが、それでも自分は平均よりかなり上という設定を持っていて、一般より高い要求を持っており、それが満たされるまでまったく納得しませんという厚かましが全身にみなぎっている。面接で自分の長所を

聞かれたら『そうですなあ……』と大マジで考えるのだろうと思う。面接官は『そんなものあるわけあるか』と嫌味のために言っているのに、きつとそのことにも気づかないんだ。周囲から見れば、何一つ成り立っていないのに、自分の中でだけは、一人前以上に何か成り立っていることになっているんだろうな。もしあなたが、偶然カンヌ映画祭の会場前に紛れ込んで、係員がジョークで『どうぞ』と言ったら、あなたは平気でレッドカーペットの中央を踏んで歩いていくのだと思う。もちろん係員は、こんなみずぼらしい奴がまかりまちがってもレッドカーペットは踏まないと健全に確信してジョークを言っているのだが、あなたはそういう人類普遍の感覚を軽々と突破するくらいぶつちぎった自己愛を持っている。誰もそんな奴が現実にいるなんて前提にしていない。仕事中は業務だけしていたら何も言われないし、SNSでは文言や写真を恣意的に加工すればそれなりに『いいね』をつけてもらえるが、それはただの情性であつて、お前の実物を一ミリだって認めたわけじゃない。写真のお前は数秒ぐらいなら見られるが実物のお前は数秒も見ていられないということなんだ。いかなるボランティアもお前と並んで散歩するということは断るだろう。表面上お前を差別しないのは、この世で風俗嬢と救急隊員だけだ」

ぐらいいは言わねばならない。

空想でない現実というのはそういうものだと思う。

「ひょっとしたら、きわめて例外的に、聖人のような誰かがいて、その人は何もかもを把握したレベルの高さから、それでもお前のことを憐れんで、お前に一縷の光を垂らしてくれることがあるかもしれない。だがそれにしても、きつとお前はだめで、そのときにこそお前は空前絶後の、とんでもない自分の本性をこの世界に顕示すると思う。つまりそこまで一方的な愛と献身を受けてもなお、お前は不機嫌そうな顔で、自分だけが特級に偉くて、垂らしてくれた一縷の光を、平気で自己救済のために消費するだろう。そのときお前は、自分がまじめに考え、真剣に受け止め、真摯に向き合っていると感じる。そこで仮に、すべてを目撃していた絶世の美女が、許しがたさに激昂して、

お前のことを裂帛の気魄で怒鳴りつけたとしても、お前は何か一つハッと気づきはしないし、何一つこころの底から反省などしない。お前は自分で毎日何をやらかしているか、まったく『心当たりがない』。いかなる批判も是正もお前の中枢に届くことは決してない。何を言われても、お前は都合の悪いことについては必ず『心当たりがない』。仮に聖人のような誰かが一縷の光を垂らしてくれたとしても、そのときでさえお前の内部は薄い感謝が半分と、もう半分は手前味噌でこねあげられた批評が満ちているだけだ。お前は完璧なままで他人のことがわからないから、もし誰かが渾身でお前に心臓を分け与えてくれたとしても、そのことへの感謝は、コンビニのくじ引きでギョーザが当たりましたというときの『ラッキーです、助かります』という程度と同じなんだ。そんなことは許されるわけがないと、お前は理屈でわかるけれど、それでも本心に許しがたさに震えるほどそう感じるかというと、やっぱりお前には『心当たりがない』んだよ。お前は自作の『空想された現実』に適合する都合のいい『共感』だけを恣意的に残して、その他都合の悪いことには心当たりが起こらなくなるよう、認識機能を損壊させてきた。老人が演歌とふるさと礼賛と敬老とときたりと親孝行にだけ恣意的な『心当たり』を残してその他の心当たりは恣意的に消去したように、お前はマンガやアイドルソングや社会的な正義等、自分にとって都合のいいものだけに『心当たり』が残るよう自分に細工してきた」

本稿の締めくくりに、それぞれの階層に表れる、性質と現実について書き記していきたいと思う。

冒頭からお話ししているように、現代人は現実を受け容れられない。

現実を受け容れないために、耳を閉ざしたのだったか、あるいは目を背けたのだったか。

違う、認識機能を損壊したのだった。

現実を受け容れられなくて、耳を閉ざすとか目を背けるということなら、誰だってそういうことがあるのは知っている。

でも現代で起こっていることは別だ。

耳を傾けて目を見開いても、認識機能がそれを受け取らなくなった。全身がヒステリーを起こして、硬く重く、バラバラになり、認識機能も認知症になり、「よしこれで、現実を受け容れなくて済む」という状態が出来上がった。

現実感覚を喪失すると、日常生活が営めないはずだが、そこでもう一工夫、失われた現実の代わりに、空想で現実を捏造した。

その「空想された現実」を、元の現実の代わりにすり替えて差し込み、表面上の機能を保っている。

個々人が、認識機能を損壊したまま、「空想された現実」を背後において生きているので、人と人が近づいたとき、何も通じ合わず、何も噛み合わないくなった。

一歩踏み込むと、相互から実に、「得体が知れない」という臭いが立ち上ってくる。

人それぞれ、所属する原理というものがあって、今それぞれの人は、世界といえは自分の所属するその原理しかない、と思い込んでいる。

「興奮猿」は、マウントを取ることでだけがこの世界の統一原理だと思っているので、たとえばクロード・モネが新しく印象派の絵画を産み出したのも、何かしらマウントを取るためだと考え、もしそれがマウントを取るためのものでなかったとしたら、「まったくわからない」と、その原理と階層を「謗る」しかないのだった。

「怪児」にとっては、たとえばポップ・デイランは、舞台上で「何のパフォーマンスもしていない」と見える。

本当はきつと、そこには何かあるのだろう。そのことは、なんとなく類推できるだけの知能が残っている。

けれども、全身がすでにヒステリー状態で、そこにあるらしい「何か」については、びくりとも反応しようとしなない。

しょうがないのだ。

半ば、自分自身でも、「もうしょうがない」とあきらめているところがある。

自分自身、このどのどこかで、「きつと、何か違うんだろうな」と、絶望的に思うところがないではない。

けれどもそれ以上に、「たぶん、もうどうしようもない」という確信が、どこかにあるので、もう無駄な抵抗はしたくないとも思っているのだ。

何であれ、自分が疲れているのは事実だから。

いつそ自分自身を、諦めきれしてしまえば、楽なのかもしれない。

そうしたほうが楽だと信じて、自ら自分の症状を押し進めるようにしてきたところさえあるかもしれない。

どうせ永遠に生きるわけではないし。

ところが、楽になるはずが、何か「そうはいかない」と、底知れぬ恐怖がたびたびやってきて、その恐怖こそ真なるもので、この恐怖には到底、自分は立ち向かいようがない予感がするのだ。

どれだけ騒いでみても、どれだけ何かに耽溺してみても、その恐怖を忘れられるのは一時のことで、必ずそれは再びやって来る。やって来てその存在を思い出させる。

そしてそいつは、やって来るたびに、徐々に自分の側に近づいてきているのだ。

自分は、このとてつもない巨大な恐怖と、やがて一人きりで向き合わされるのだろうか？

そういう状態が現在ある。

何をどうすればいいのかなんて、誰にもわからないし、僕にもわからない。それぞれの階層の、性質と現実について、以下に個別に描写していく。

【最下層】「誤導」…所属原理「憤怒、悲鳴」

現実的には出会わないほうがよいレベルのもの。表情は常に不穏であり、ただの歩行でさえ、いつも人に「詰め寄る」ような歩調になる。目つきと声調は常に人を難詰している。何か少しでも出来事があると、脈絡なくまず「憤怒」をもって迎え、人に何かを言うのに、まず「憤怒」を入口にする。

「わたしは怒っているのです」ということのみで人と接触しようとする。薄皮一枚の下に、とにかくその「憤怒」を人に向けるよう準備が為されている。わけのわからない憤怒のかたまりであり、もしその憤怒を停止させると、それ以上の恐怖の悲鳴が内部に鳴り響くので、当人はその憤怒をやめることができない。憤怒をすべての入口とし、その憤怒が肯定されるとわけのわからない落ち着き方をする。典型的に、スポーツやゲームのルールを把握する能力をもたない。そのぶん「しきたり」への異常な執着を見せる。

多く、さびしいところに閉じ込められ、迫害や差別を受けてきた人に多い。同時に、さびしいところに閉じ込められ、迫害や差別を受けてきた者は、自己愛と自尊心の保護のため、その中で縫るものを自作するから、閉じ込められた中で独自の信仰を作りだしている場合もある。その信仰を元に徒党を組むケースも多い。またその信仰を自己愛の肯定に注ぎ込んだからこそ、通常で予測される自己愛の範囲を飛び越した、想像を絶する自己愛のみを所有することになる。湧き上がる自己愛が神であると確信しているという状態が長く続き、当人はその信仰に疑念がないという状態になっている。そのすさまじい確信が「誤導」の特徴でもあり、またそのすさまじい確信があるからこそ、誤導は他の人々に対して自分が「教える」べきだとも感じている。「誤導」という呼称は、当人の成り行きが半分、もう半分は、そうして最下層から人に「教えよう」とする確信を持っている性質のことを指してそう呼ばれている。

病的なクレーマーやモンスターペアレンツなどもここから出現することがよくある。彼らは怒っているからクレームを申し立てているのではなく、憤怒を噴き出す機会に自動的に反応しているにすぎない。彼らはいつも、自分の内なる巨大な悲鳴から逃れたくて、憤怒を噴き出す先を探しており、そのことに目がない。ヒステリーの症状はきわめて重く、身体が動かないというよりはすでに「止まらない」という状態にあり、その状態はいっそ時計の秒針が止まらないのと同じ仕組みで、ただ止まらないものと見える。電池が続くかぎり動き続ける。当人の意志などはもうはるか昔に消失したままだ。

電池が続くかぎり自動的に人に詰め寄る装置だということを前提に捉えるのがよい。憤怒によって常に詰め寄って来、確信を元に何かを「教えよう」とし、憤怒が肯定されると不明の落ち着きを見せる。

▼対処法は、まず常識的な範囲でその憤怒や悲鳴を受け取らないこと。彼らは所属原理が憤怒と悲鳴であるため、何の理由もなくても常時、憤怒と悲鳴に満ちている。憤怒が肯定されれば極端な鎮静を見せるということも覚えておくこと。自動的に人に詰め寄り、憤怒を噴きかけるという装置になっているので、驚いたことに当人は、昨日自分で言ったことを忘れていたりもする。あまりにも「確信」をもって憤怒を噴きかけてくるその姿に初めは真剣に向き合いそうになるが、その「確信」はあくまで恐怖と悲鳴を覆い隠すためのものにすぎないので、表面上の「確信」ではなく先に積み重ねてきた「恐怖」のほうを看取すること。

▼上方転属の手続きは、「甘み、蕩け」を学び、「興奮猿」に憐れみを乞うことになるが、このことはあまりに現実的ではないので、本稿では原理的にそう指摘するに留める。「誤導」は、たとえば暴力団に憐れみを乞い、どこかで母子関係のような甘み、蕩けを学べば、「怪児」に転属できるかもしれない。そのとき所属原理は憤怒でなく甘みと蕩けになるだろう。だがどちらにせよひどいものだ。いちおう悲鳴と憤怒からは離れられるので、当人にとっては偉大な解決と感じられるかもしれない。

【深下層】「怪児」…所属原理「甘み、蕩け」

現実的には出会わないほうがよいレベルのもの。表情はうつろであり、ずっと追い詰められて怯えているような気配でありながら、心身の反応と全身の挙動はひどく緩慢だ。全身の表面は緩慢で気だるいのに、全身のないぶは剛直しているのが特徴になる。対人関係においてその緩慢と剛直はピークになり、たとえば「テーブルのそっち側を持って」と共同作業をさせると、それだけで神経が混線して全身は痙攣様になる。その挙動がペンギンのようになつたり夢遊病のようになつたりする。それでいて目だけは見開かれており、

眼球は迷い尽くしたように光がなくうつろだ。眼球が母親を捜し求めており、唇は吸い付くべき母親の乳首を探し始める。過去に暴力やいじめを受けてきた人に多い。マザコンの重篤化でもあるので、中年になつても親族のことや幼少期のころを言い続けているケースが多い。症状のピーク状態では特に、声に異様な「暗さ」がこもる、という特徴がある。

ヒステリー状態はきわめて重く、「空想された現実」は、世界に自分しかないという現実を選択する。本質的に引きこもりの症状となる。ここで、世界には自分しかないという現実を選択する以上、怪児は他者の存在をヒステリー的に消去していることになる。これにより、まるで公共の場で自室のような眠たさの顔を見せて(蕩けて)のさばったり、あるいは特徴的に、「自己卑下」と「ひどい厚かましき」が同時に極端に出るのが典型例になる。世界には自分しかないという現実を選択しているため、自己卑下を起こすと公共のど真ん中でもその自己卑下に浸るし、一方で人と接触するときには、他者が存在していないのでその「距離感」が存在せず、不気味なほど厚かましかったりもする。仮に、彼が公共の場で自己卑下を真っ盛りに行っているところ、もしそこそこ値の張るアクセサリーなどを差し出せば、彼は無言でそのアクセサリーを手に取り、自分のものとして所有して持ち帰るだろう。そのとき彼は礼など言わない。「空想された現実」において、彼の他に人などは存在していないので、彼にとっては礼を言う対象がない。ただ彼は差し出されたアクセサリーの甘みを受け取ったにすぎず、その挙動はいわば昆虫と砂糖水のあいだに起こるものと同じだ。

自己卑下と厚かましきのアンバランスと共に、怪児には「腰の低さ」がまったくないことが特徴になる。緩慢な全身と眠たそうな表情は、裏腹に追い詰められた目つきを持っており、ひどく怯えて引きこもりがちに見えるのだが、体幹はグンと剛直して腰の低さがない。怯えているので態度は卑屈そのものなのだが、ヒステリーにより他者の存在を消去しているので、他者に向けて身体が低さを取るという節度の現象が起こらない。物腰が高い態度が不自然なので、当人の意識はそっぽを向くか、もしくは異様になれなれしい笑

顔を擦り付けてくる。その物腰の高さに合わせて、自分の能力への評価は漠然と大きく高い。他者から見ると、「なぜか何でも出来るつもりでいる」ように見えるし、事実本当にそのように思っている。それは、他者が存在しないことよって、能力の比較対象が存在しないからだ。「誰か」が何かを為し遂げているということが視えないので、自分には漠然と何でもできるような錯覚が起こり続ける。よって、何にでも挑戦するので、初めはその神経の太さが周囲を驚かせるが、挑戦したものの何の実現もならないとき、当人は何も感じないようにボカーンとしているので、周囲は「なんだこいつ」とその不気味さに眉をひそめる。

▼対処法は、甘みを与えないこと。怪児の挙動は昆虫に類似しており、怪児は常に甘みと蕩けを摂取するために徘徊しているにすぎない。先方にとつてこちらは存在していないのだとよくよく認めること。昆虫に距離感はなく、たとえば蚊は、「誰か」の血を吸いに来ているわけではなく、ただ二酸化炭素を検知して皮膚に貼り付いてきているだけだ。人と共働するということが不可能だということをよく認めること。典型的に、たとえば「テーブルのそっち側を持つて」と指示すると、本当にテーブルのそっち側を「持つ」だけで、こちらがテーブルを持ち上げたときに、それに共働して持ち上げることもしない。本当に「持っている」だけで、それでテーブルがひっくり返っても彼は何も感じない。彼は指示通りにテーブルを「持つて」いたので。彼には指示を認識する能力はあるが、「誰かの指示」を認識する能力はない。怒鳴りつけてもまったく意味はなく、ただ冷静に共働作業からは除外するしかない。

▼上方転属の手続きは、「マウント、思う」を学び、「チーム」に憐れみを乞うことになる。つまり、物腰高く突っ立っていると、「何様だコラァ」と竹刀で張り倒されるということを学ぶしかなく、しかもその向こうに、「チーム」への憐れみを乞うという態度が必要になる。憐れみを乞うて「チーム」から憐れみを掛けられないうちは、竹刀で張り倒されることはただの意味不明な暴力としか感じられないので、この手続きは安易に試みられてはならない。

あくまで現実に考えると、このことは、彼の巨大化した自己愛の求めるところとはあまりに正反対で、当人の地力でその環境に耐えるというところはほぼ不可能だし、それ以上に、そこまでして怪児を上方転属させるのに協力してくれる誰かは動機の次元から存在しえない。

それでも、ごくまれに、この怪児の階層から出られる人がいるとすれば、それは二つ上の階層「チーム」に、誠実に憐れみを乞い続けた人だけだろう。

【下層】「興奮猿」…所属原理「マウント、思う」

現在、最も多くが所属している階層。わざわざ出会いたいとは思わないが、多数派として最も頻繁に出くわすレベルのもの。内部で血が暴れており、裏腹に肌には艶めきがない。先の「怪児」が昆虫に似るなら、この「興奮猿」はまさに獣そのものという様相になる。声が汚く、発声は常に喧々としており、粘膜は常に粟立っている。話し始めると止まらないという特徴があり、また、人の話が終わる前に話し出すという特徴も典型的だ。いつも「マジ」な何かを探しており、「マジ」な何かを見つけると騒ぎ立てて、上から何かを評論するとすつきりする、という一連のパターンを繰り返して暮らしている。傍から聞いているとその話は「うるさい」と聞こえるのが特徴で、また同席で聞いているとその会話は短時間でも「疲れる」のが特徴だ。身体的には、動きは乱暴だが行動は遅い。

ヒステリー状態は有為にわかりやすく、現実を受け容れなくて済むように、認識機構を単純損壊している。よって彼の内心は、常に「わからない」ないしは「わかんねー」という吠え声で満ちている。またそうして何もかもが「わからない」ために、彼は自分の「思う」ということがすべてというように錯覚する。それで彼の所属原理は「思う」になる。ある人が「○○○○つてうざくね？」と言いつつ、「あの映画、もっとこうしたほうがよかったと思うんだよなあ」と言う、それらは本来何の「話題」でもないのだが、彼らにおいては自分がそう「思う」ということを吐き出す一点において、それが「話題」だと感じている。

すでに誰でもが知るように、街中の酒宴などを見かけると、一部にはすでに怒号を発しているような人たちもおり、えげつない笑い声が起こっているが、そこで何が話されているのかは、傍から聞いていてもまったくわからない。鼓膜に痛みを感じるほど大声が聞こえてくるのだが、それでも話の内容は一ミリたりともわからないのだ。それは、彼ら自身が「わかる」という機能を損壊させて、「思う」という機能だけでマウントを取り合っているからに他ならない。

「興奮猿」には今、大きく分けて、いわゆるオラついている組と、いわゆる意識高い系という組があると思うが、両者を分別する必要はほとんどない。毛色は異なるがどちらも興奮猿であることは変わらない。彼らは咲き誇る桜を見たとき、桜を見るとというような原理は彼らの所属にないので、「マジ超キレーじゃね？」と、思ったことを怒鳴るか、「この桜の文化だけはこの国のものとして残って欲しいわ」と、思ったことを意見にして唱えるかする。彼らにとつてたとえれば映画を観るということは重要ではなく、観た映画について「どう思ったか」だけが重要になる。所属する原理がそれである以上、その他の反応はありえない。

このように考えると、興奮猿のことはわかりやすい。たとえば僕が、「そういえば中学生のころ、おれは割と紅茶オタクだったな」と話したとする。すると興奮猿の彼は、「紅茶とか、こだわりたいっすよね」と、まったくわけのわからない応答をする。本来「へえ、意外ですね」とでも応答していればそれでいいのだが、所属する原理が異なるので、彼は必ず「マウント」と「思う」の中になくはならない。

興奮猿の彼は、「紅茶オタクだった」という話に対し、とっさにマウントの取り合いを考えている。ひよっとすると彼にとつて、紅茶にこだわるといふようなことはハイソな何かに思えたのかもしれない、それで慌てて自分もそういうハイソな性質があると主張するために、「こだわりたいっすよね」と応答した。興奮猿はこのように、いつもとっさにマウンティングに反応しており、なるべく自分がマウントを取り、マウントを取られないように、とっさに自

分が「こう思う」ということをひねり出して応答している。「伊能忠敬は五十歳を過ぎてから、つまり役目を引退してから地図作りの旅に出た」という話をする、彼は「マジ尊敬しますよね」と、必ず自分の「思った」ことを言う。それもマウンティングの駆け引きとして言っているだけなので、もちろん彼が伊能忠敬をマジで尊敬していることはまったくない。

▼対処法は、わかろうとしないこと。興奮猿自身、「わかる」という認識機能を損壊させ、内心ではすべて「わからない」と感じながら、次々に「思う」ことを言っているだけなので、その発言内容をいちいちこちらがわかろうとしたら、こちらの機能が空回りして焼け付いてしまう。

彼に何かをわからせようとしないこと。彼には思う機能しなく、わかるという機能はない。彼に三角関数を教えれば、彼は三角関数を覚えるかもしれないが、それは彼がお勉強でマウントを取られたくないから暗記しただけにすぎず、そもそも三角関数に何か「わかる」という感覚が彼の所属原理にはない。

彼はそのときごとに、調子に乗れば「思う」ことを際限なく言い続けるが、その彼の「思う」ことを、理解するべきではないし、アテにもしないこと。

彼はその場でマウント関係が有利になるようすべてのことを発言しているにすぎず、つまり彼の「思う」は彼の本心でも何でもない。仮に「フェラーリとかまじかっけえ」と大声で言っていたとしても、そのように発言するとマウント関係において「強い」かなど、その場の駆け引きで反応しているだけでしかない。その証拠に、エンブレムを隠されると、彼はどの車がフェラーリかわからない。

▼上方転属の手続きは、「力、上昇」を学び、「エース」に憐れみを乞うことになる。

「できていないじゃない」と、さんざん言われ尽くす必要がある。興奮猿は、初めそれにマウント反応をし、何か思うことを反論しようとするが、その一切は取り合ってもらえず、「できていないじゃない」とだけ言い尽くされる必要がある。その「できていないじゃない」が言い尽くされ、マウントや「思

う」の反応がいいかげん消え尽くしたとき、ついに「チーム」の階層が「何ができるようになるか」として「思」が消えたとし初めて鮮明に「できる」が視える。このことは人の一生を大きく変えるだろう。

ただしこのとき、「エース」から憐れみを掛けてもらっていないと、「できる」ということをもって「できない」人にマウントを取るところへ帰ってしまうだろう。そうになると、決まって「ガラの悪い職人」になってしまう。

マウント原理はさまざま「ルール下でのマウント」を形成するが、けっきよくマウント合戦では野生のゴリラに勝てないことを忘れてはいけない。上司やおばさんが若い人にマウントを取るのには、「暴力によって加害・殺害されない」というルール下で成り立っているにすぎない。マウント原理者はこのようにマウントと実際の「力」の区別がつかず、ルール下に成り立っているものを「力」と誤解しているうちは上方転属どころか上位の原理を学ぶことすらできない。

【中層】「チーム」…所属原理「力、上昇」

出会えたならば基本的によろこぶべきもの。すでに世界愛の断片が混じっており、世界愛の断片が混じっているからこそ力と上昇を原理にできる。マウントの原理と峻別せよ。彼が努力するのは誰かを見返すためではないし、コンプレックスをバネにしているのでもない。己の力を高めて活躍すること、また誰かと力を合わせて上昇することを、それ以上は遡る必要がない原理にしているだけだ。このあたりから典型的に、「明るい人」という感触が伴い始める。性格が明るいというより、その人が来るとパツとその場が明るくなるという現象が起こる。

この階層から典型的に、具体的なレスポンスが速い、ということが起こってくる。所属する原理が、第一に自分の力を使うということなので、「起立」という号令が掛かる前から、起立するための力が屈託なく準備されている。仕事の内容を指示されてからやる気を出そうとするのではなく、内容を指示される前からやる気が未来に充填されている。彼が朝起きるのは、学校があ

るからでもなく仕事があるからでもなく、今日もまた活躍するためであり、今日もまた上昇するためだ。疲労がないわけではないが、彼には迷いがない。疲労はただ休めばいいだけだ。また、「ちょっと休みます」がごく自然なことに聞こえるのも、この「チーム」階層の特徴になる。彼は無理をしていないが誰よりもよくやっている。

それでも、ヒステリー症状がないわけではない。彼は未だ、理や愛の原理には所属できておらず、理や愛がなんとなくわかりつつも、到達できる感じがしないため、万事を實力と成果だけでねじ伏せようとするところがある。彼は本質的に明るい場所に立っているが、これから先はまだ長いと痛快に感じられねばならない。なるべく若い内にこの階層へ到達するのが望ましく、力と上昇は単純に加齢と共に不利になっていく。

典型的に、プレイヤーとしてはこれ以上なく頼もしく、輝かしいほどであり、一方で、マスター（リーダー）として立つとなると、なんとなくまだ頼りなさが残るという存在だ。協力することに優れるが、命令することにはまだ優れない。

注意せねばならないのは、このチームの階層、力と上昇の原理は、力を溜め込むという原理ではないし、上昇を言い張るといふ原理でもないということだ。近年流行している筋力トレーニングの原理は、その筋力で何かの活躍を担うという明るい原理から流行しているのではなく、多くは体形的自信からマウントの取り合いで有利になるためという向きが強い。チームにおいてはそうではなく、チームでは直接の原理が力と上昇であり、力と上昇をもってマウントで勝とうとするのは所属原理が異なる。

▼対処法は、力に逃避させないこと。この階層からは明るいから、物々しく「対処」を必要とするものではない。

「チーム」はすでに明るいので、逆に、そのまま滞留し続けてしまうことが多い階層でもある。それでも決して、貧しい時間ということにはならないけれども。とはいえやはり、この階層に永遠に居続けるわけにはいかないと直観もされるから、やたら力と上昇の明るさを称賛し、当人を力の明るさに埋

没させないこと。その称賛はある線から当人の幸福へ寄与していない。

過保護にしないで、「チーム」階層の者はすでに、そうヤワでない実力を自身で獲得し始めている。すでに当人が、これだけで満たされるわけではないということ、明らかな希望として知っているはずだ。

▼上方転属の手続きは、「理、愛」を学び、「応供」に憐れみを乞うことになる。

「お前がやれ」と言われ続ける必要がある。「お前がやれ」と言われ続けたとき、自分にはいくつかわかることをやる力があるけれども、なぜそれをやるかを自分で掴めていないということがわかる。どうやるかは知っているがなぜやるかは知っていない。

力を得て、仲間ともども上昇するということは、まだ本能の範疇に収まるけれども、その先にはいよいよ本能的動機がない。本能的動機がないからこそ、万事に愛が必要だということがわかる。愛がなければ「始まらない」ということが原理的にわかる。本能的動機でない「愛」を掴むのはたいへんむつかしく、ここでそもそも身の本能は「わたし」ではないということ、厳密に捉えていくのに、理と学問が最大の味方だということがまざまざと発見されてくるだろう。

とはいえこのことは、自分の上方転属のために「愛」を掴もうとしているという点で矛盾している。愛というならそれは自分のためであってはならないだろうし、かといってそれを「誰かのため」と言い出してもうさんくさいだけだ。

よってこのとき、「応供」から憐れみを掛けてもらっていることが必要になる。「応供」に憐れみを乞うていないと、愛は安易に「不可思議なもの」と誤認され、チーム者はエースにならずただ浮世離れた行方不明者だけがそこに残るだろう。

【上層】「エース」…所属原理「理、愛」

出会えたならば、浮かれていないで気を引き締めるべきもの。すでに主導

は自己愛ではなく世界愛の側へ移っており、すでに一種の、不思議なオーラを纏っている印象さえ漂い始める。

この層へ到達すると、典型的に集中力が違う。レスポンスの速さは、単に具体的な速さに留まらず、万事に「集中しよう」というプロセスを要さなくなり、何かに取り組むことが同時に集中力の発生になる。

その姿は明らかに安らいでおり、満たされて朗らかでいながら、自分の取り組むことについては常人離れた厳しさが継続し、周囲の誰をも圧倒する。ときおり、目を疑うほど「うつくしい人」「うつくしい瞳」「うつくしい姿」を見せる。とてつもなく「かっこいい」と見えることもある。

典型的に、「あ」と言っていて、どこからともなく発明を持ち込んでくる。明るく寛いで笑っているが、常時、発見や発明が続いているような状態だ。すべてのことについて、前例やパターンから切断された、常にそのときの新しいものを営んでいる。そのときすべての発見と発明は、なぜか理屈では説明のつかないよろこびに満ちており、周囲もそのよろこびに巻き込まれるが、もはや周囲の誰も自分が何によるこんでいるのかわからない。ただ静かに何かのよろこびが満ちてくる。彼の言うことは常に理に適っており、理に適っていると確信されるのに、他の誰もその理を後に説明することができない。理に適っていることが愛だと直接感じられるが、なぜ理に適っているのが愛なのかは誰にもわからない。

この階層、この原理に所属できたならば、いわゆるリーダーシップや、いわゆるクリエイティビティなどを必要としなくなる。彼の一拳一投足はすべて周囲を牽引するものだし、彼の振る舞うすべてのことに陳腐という性質はなくなる。ありとあらゆる前例やパターンから切り離されているのだから、すべてはその場で新しくクリエイトされているものであり、よっていちいちクリエイティビティのわざとらしさを經由する必要がない。

リーダーシップなど意識しなくても、彼のすることに、誰もが無心についていってしまう。それはもちろん、彼に権威があるわけではなく、ただ彼が何かをすれば、周囲も説明のつかないよろこびに巻き込まれていくというだ

けだ。誰もよろこびに取り残されたいわけではないので、気づけば全員が無心についていってしまう（ただし、二階層以上離れている人は、しばしばこのよろこびから切り離されてしまう。つまり憐れみを乞うていない興奮猿以下はこのよろこびから切斷されてしまう）。

特徴として、ジャンルからの離脱がある。ふつう、先にたとえばバスケットボールという競技があり、人がそのジャンルに参加して、プレイヤーになるものだが、エースに限り、「彼がボールをドリブルするからバスケが始まる」ように見える。実際、そこに始まるゲームは、ジャンル化されたバスケットというパターン営為とは別のものだ。彼が笛を吹くと、そこから音楽が始まるように聞こえる。それは通常の、音楽というジャンルに人が取り組むという形とは根本が異なる。

すべて彼が始めるから始まるのであり、だからこそ、彼がおつ始めたことに誰もが自動的にについていってしまうという感じだ。「ぜんぶこいつが引っ張っていつているじゃん」。そのどこからともない能動性の湧出が「エース」最大の特徴だ。この能動性の源泉にみんなが引き寄せられる。すると、誰も「協力」する意識はなかったのに、気づけばひとつのことを全員でやっていることになるので、そこには「協力」以上の現象が起こっていることになる。これは「チーム」階層の、「力、上昇」という原理を超越している。

▼対処法は、そのうつくしさとかっこよさに、見ている自分が錯覚を起こさないこと。エースにはあまりの説得力があり、あまりにも特別な空間をそこに作り出すから、うかつにも自分も特別な空間に参画したという思いを強くしてしまう。特別な空間に参画したのは事実によ、自分が特別な者になったわけではない。

エースに対し、周囲は、最善を尽くしながら、背伸びはしないこと。あえて言うなら、エースと自分を切り分けること。切り分けても得られるよろこびは減少しない。仮に街中で、極端に醜い者に出くわしたとき、その醜い者と自分を切り分けて捉えるのが適切であるように、エースがただならぬ輝きを持つ場合、その輝きに追随しながらも、あくまでエースと自分を切

り分けて追随することが適切だ。あくまで現在の自分の所属と学びの中で尽くせる最善を尽くすこと。

▼上方転属の手続きは、「記号、世界」を学ぶことになる。ひよっとすると、同様の「応供」に、憐れみを乞う側面もあるのかもしれない。この領域まで及ぶとさすがに定かではないが、それでもいつまでも自分は憐れな者にすぎないという現実受容は続いているものだ。ただしこのときすでに、憐れみを受けている憐れな者という地位は誇りになっっている。

上方転属というが、本当にこれ以上に転属せねばならないのか、僕には断言できない。ただどこまでも、薄いゼロファン紙がどこかに一枚挟まっているかのように、「しよせん憐れみを掛けてもらえなくなれば一瞬で滅ぶ」ということを知り続けていなくてはならない。それさえ保たれるならば、これより上に転属することは必須とは断言できないと申し上げておく。

それでも上方転属するということであれば、何もかもを取り外しなさい。ただし何もかもを取り外していくとき、崩れてしまうぐらいなら、まだ上方転属できないので、引き下がらなさい。

エースは人が世界の一端に触れている状態だが、応供は世界の一端が人に触れている状態だ。

例え話にしておきたい。赤子は初め、這い回ることを覚え、そのあと掴まって立つことを覚える。その後、支えがあれば二足歩行できる、という状態になる。

本当に二足歩行が成り立てば、その支えは要らなくなる。

支えをぜんぶ取り外しても、倒れなくなった。

支えをぜんぶ取り外しても「同じだ」ということになる。そのとき上方転属が成る。

【最上層】「応供」…所属原理「記号、世界」

この階層については詳しく述べない。いくら不遜な僕といえど、こんな階層のことを偉そうに講釈するような身分をさすがに標榜する気にはなれない。

ただ、何もかもを取り外すというようなことを、漠然と申し上げておきたい。僕の知る限りのことについて。われわれはさまざまな記号と「forms」に意味をくっつけているが、意味がなければ記号が存在できないわけではないので、取り外すことだ。記号だけがあつて何の不都合があるか。

時間が流れているという実感があるのだとすれば、「わたし」からその実感を取り外せ。わたしから取り外された実感のうちでどのように時が流れても「わたし」には関係がないだろう。

さまざまな、わけのわからないことがある。わけのわからないことが起こる。わけのわからないことが体験される。わけのわからない幸運などがあり、そうした幸運の降り注ぎがなければすべてのことは成り立たないのだ。

多くの人は、「ふしぎな世界」というようなものを、イメージすることがあるのかもしれない。が、僕にとっては世界ということの世界しかないのだ。この世界ではない何かの世界をイメージする必要を覚えなない。

イメージしなくても目の前に世界があるので（当たり前だ）、この世界をひとつの記号だとして、その記号に意味を持たせないでも、別に世界を見失うことはない。意味を付与しなないなら思議することもできないし、そもそも世界が存在するものを思議する必要はまったくないと思う。

▼対処法は、無えよバーカ。

▼上方転属の手続きは、もし上方転属があるのだとしたら、もうどこかの誰かに頼むしかない。おれに手続きできるような次元じゃない。

おれに手続きできるような次元ではないので、僕は堂々と、無尽の自信を持つことにする。

もうこの先はおれが何をどうしても変わらないからだ。

上方転属が、もしあるのだとしたら、誰かうまいことよろしく。

誰かにそうしてよろしく頼んだので、僕はデタラメな自信を極めることにしよう。

このように、「現代人は現実を受け容れられない」ということから発生して

きた、六つの階層について述べた。もしこの話を、それぞれが自身の役に立てるのなら、あくまで第一には、自分の「所属」する原理、「所属」する階層を見極めることだ。触れられる原理ではなく、触れられる階層でもなく、自分の「所属」する原理・階層だ。

何もむつかしいことはない。頭だけで考えるから余計にむつかしいことのように錯覚する。もっと単純なことだ。たとえば学校からの帰り道、あるいは勤務を終えて会社から出たところ。

その瞬間、自分はどの原理・どの階層に属しているか。

よもやそんなとき、いきなり「記号、世界」の原理に属しているという人はいないだろう。帰り道にどこへ行く気だ。

学校を出て、ふと原理は「愛、理」？

それもたいへんレアなケースだ、シェイクスピアかアインシュタインか。

ふと原理は「力、上昇」か、それは若い人のあるべき姿かもしれない。

ふと原理は「マウント、思う」か、パチンコやトレーニンングジムに行くだろうか。

ふと原理は「甘み、蕩け」か、急いで帰宅して溜めたアニメ録画を観るだろうか。

ふと原理は「憤怒、悲鳴」か、早足で何かの市民集会に向かうだろうか。自分が所属する原理・階層に、見当がつきづらい場合、自分にとって「気休めの趣味」と、自分にとって「リアルな課題」を考えるとわかりやすいかもしれない。自分にとって「気休めの趣味」はたいてい一つ下の階層であつて、自分にとって「リアルな課題」はたいてい一つ上の階層だ。

たとえば怪児は、気休めにネットでグロ画像（悲鳴）を観ていたりするし、オラついている人は意外と癒しにアニメを観ていたりするし、チームもたまに勝ち負けのはっきりしたゲームを観てオラついたりしている。

あるいは、何かしら作品を手がける人ならば、自分がつくる作品に表れている原理がそのまま所属原理なのでわかりやすい。

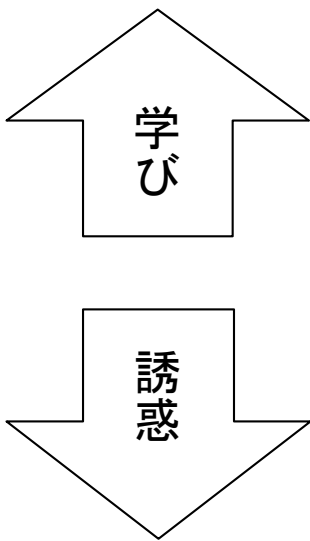
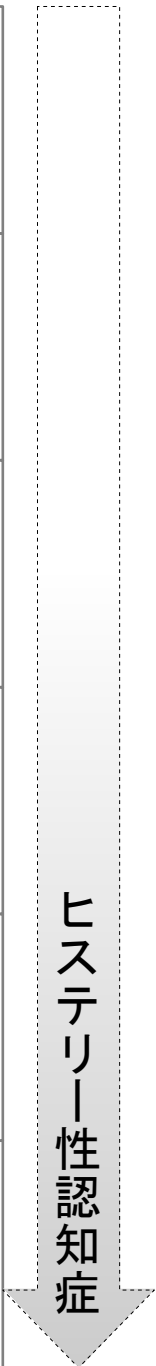
ほとんどの人は引き続き、「憐れみを乞う」なんてことは発想しないだろう

し、たとえ今ここで知ったとしても、早晚忘れ去ってしまうだろうけれども、けっきょく最後にものを言うのは、その「憐れみを乞う」という方法なのだと思う。それはわれわれの知らないレベルで、何か真実の方法なのかもしれない。だから、どこかに記憶しておいてほしいと思う。ひとつ上を学ぶということに、どれだけ努力しても、けっきょく自分が変わらなかったのは、ふたつ上に憐れみを乞うことが抜けていたからだ。

　　というわけで、現代人は、憐れな現実を受け容れられない、というお話でした。

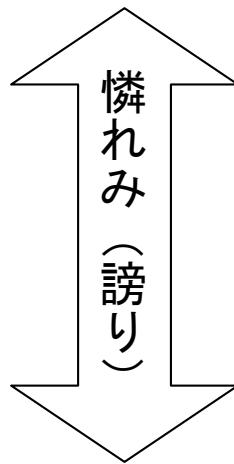
「現代人は現実を受け容れられない／了」

最上層	おう ぐ 応供	(世界、記号)
上層	エース	(理、愛)
中層	チーム	(力、上昇)
下層	興奮猿	(マウント、思う)
深下層	怪児	(甘み、 ^{とろ} 蕩け)
最下層	誤導	(憤怒、悲鳴)



(導きがあると)
一階層上からは
学ぶことができる
(これだけで転属は
起こらない)

(導きがあると)
一階層下からは
誘惑を受ける
(これだけで転属は
起こらない)



二階層差があると
アクセス不能なので
「憐(あわ)れみを乞う」
「憐れみを掛けられる」
しかない
(憐れみを乞わない場合
人は二階層上を誇(そ)いる)

学び + 憐れみ → 上方転属

誘惑 + 誇り → 下方転属